MAJORがパワプロの世界で且つプリキュアキャラが存在する状態で話が進んだら

Quick

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんなものを書きますが、どうかよろしくお願いします。

質問も受け付けるので、感想のページでどうぞ。

目　次

設定
登場人物（リトル編　パート1）　※少しネタバレあり　――　1
リトルリーグ編
この小説について＆プロローグ　――　5
ドルフィンズに入るよ！　――　8
みんな友達だよ！　――　12
ドルフィンズを守るよ！（能力紹介あり）　――　20
みんなで試合だよ！　――　29
雨にも大人にも負けないよ！　――　38
初練習だよ！　――　54
番外編　ｓｉｄｅ―Ｙ　わたしの野球との初対面　――　58
横浜リトル？　――　66
みんなで一緒に頑張るよ！　――　77
合宿だよ！　――　81
能力紹介　パート２　この小説の時間軸（アンケート有り）
87
練習試合だよ！　――　93
あたしがピッチャー!?　前編　――　97
あたしがピッチャー!?　中編　――　104
あたしがピッチャー!?　後編　――　110
恐怖なんて吹き飛ばせ！　――　116
チェンジアップ・・・？　――　121
横浜リトルには勝てない・・・？　前編　――　129
横浜リトルには勝てない・・・？　後編　――　135

目指せ！　全国！　141
新たな出会い　吾郎side　149
新たな出会い　マナside　154
新たな出会い　三船リトルside　160
どうしたの本田くん？（前編）　165
どうしたの本田くん？（中編）　175
どうしたの本田くん？（後編）　185
一緒にがんばろーぜ　191
いよいよ大会！　200
強敵!?　vs本牧リトル！　207

設定

登場人物（リトル編　パート1）　※少しネタバレあり

三船ドルフィンズ
嘗ては強豪チームだったのだが、子供の野球離れが影響してか、メンバー不足に陥り解散の危機に追い込まれる。

本田吾郎
ＭＡＪＯＲの主人公。
プロ野球選手だった本田茂治の息子で、現在は父の婚約者であった星野桃子と一緒に暮らしている。
野球センスはずば抜けたものを持っている。エースで４番。

相田マナ
ドキドキ！プリキュアの主人公。
世話焼きで、困っている人がいたら助ける。ドルフィンズがメンバー不足で困っているのを知り、助けてあげたいと思い、チームに入ろうとする。
身体能力は高い。外野を守るが、チーム第２投手を務める。

清水薫
ＭＡＪＯＲのメインヒロイン（？）
吾郎に出会う前は、野球などに興味はなかったが、吾郎の野球への思いに心を打たれて、ドルフィンズに入ることを決意する。
身体能力は酷いが、練習で野球の技術は少しずつ上達していく。

菱川六花
マナの親友。マナに誘われて野球部に入る。
運動能力は低いが、競技かるたをしているので、動体視力と反射神経がある。

四葉ありす
マナの親友。ドルフィンズには入らないが、ピッチングマシーン等を寄贈するなど、ドルフィンズのサポートをする。

小森大介
クラスメイトの沢村らにいじめられていたが、吾郎やマナが庇ったり、吾郎の誘いを受けてドルフィンズに入る。
吾郎の球をチームで唯一キャッチできる。

沢村涼太
小森をいじめていたが、吾郎の一喝や、マナの仲裁があって和解、その罪滅ぼしにドルフィンズに入る。
サッカーチームに入っていて、身体能力も非常に高い。

前原
小柄で出っ歯が特徴。お調子者でチームのムードメーカー。
バントがうまい。

田辺
たらこ唇が特徴。前原とは同じ学校に通っている。

長谷川
糸目が特徴。
主に1番を打つ。

夏目
垂れ目が特徴。真面目な性格の方。

鶴田
眼鏡をかけている。真面目な性格。

安藤
ドルフィンズの監督。チームに入る子供が少なくなり、指導者としての情熱を失いかけたが、吾郎の入部をきっかけに、再び熱意を取り戻す。

横浜リトル
全国屈指の名門チーム、プロ野球選手のＯＢも数多くいる。

佐藤寿也
吾郎の幼なじみでライバル。名門横浜リトルに入部した。

真島
横浜リトルの４番。プライドが高い。

坂上あゆみ
横浜に住んでいる。ある日、散歩している途中に野球チームのグラウンドで飛んできたボールを拾い、投げ返したのをきっかけに、野球と出会うことになる。
引っ込み思案な性格。

水無月かれん
横浜リトルの所属している。女子ながらレギュラーを務める。
お嬢様育ちなのか、世間の常識がずれている。

他にも、多数のキャラが登場する。

能力は、ドルフィンズは大人チームとの試合前に1度紹介。

リトルリーグ編
この小説について&プロローグ

この小説は、ＭＡＪＯＲがパワプロ時空の中での物語且つ、プリキュアキャラも存在しているという事になっていて、ＩＦルート満載のストーリーとなっています。

主な点として、

・リトル編からスタート
・そして、そのリトル編ではプリキュアキャラがドルフィンズに加入（予定では、２人ほど）
・その為、リトル編で吾郎酷使は改善される可能性あり
・ライバルの横浜リトルにもプリキュアキャラが加入している
・５年以降も少し書く
・中学高校では、パワプロで登場した高校も登場
・プロ野球は、セ・パ１２球団に加えて、レボリューション・リーグ（６球団）が存在する
・猪狩や友沢達は、リトル編の時点でプロ野球選手になっている（つまり、世代が全然違う）
・吾郎達の同期のパワプロキャラは、アプリ版や２０１３以降に高校野球編で初登場のキャラのみ
・プリキュアキャラは、中２のキャラは吾郎達と同学年（他のキャラは、それを基準に年齢が変わる）
・プリキュアキャラの出身地の変更、及び出身地の立地の変更あり
・プリキュアキャラの出自の変更あり
・プリキュアキャラはプリキュアにならない

ということにしています。

ＭＡＪＯＲ主体の話ですが、プリキュアキャラの介入で大きく展開が変わります。

また、活動報告で、今後をどうするのかのアンケートを採るかもしれません（それってＯＫでしたっけ？）。

まだまだ確定ではない点が多いですが、これから毎日とはいきませんが、これから連載していこうと思います。

最後にプロローグを書きます。

プロローグ

あたし、相田マナ！

昨日、三船小学校４年１組の学級委員になったんだ！

今朝、友達の六花と朝早く登校した時、張り紙が張ってあったの。

内容は、

『今、三船ドルフィンズのメンバー少なくて困っています。今、チームに入ると給食のプリンをプレゼント。詳しくは４―２の本田まで！』

へえー、三船ドルフィンズって、確かグラウンドで何人か野球の練習している人達のことだよね。ちょっと、下手だけど・・・

でも、困っているのなら、助けなきゃ！

そう思って本田君のクラスへ行こうとしたら、クラスの女の子に喧嘩していたの。結局、本田君はクラスの先生に張り紙を取れと起こられちゃったから、結局ドルフィンズの事を聞けなかったな～。

でも、今日はもう話せない訳じゃないから放課後に聴いてみよう！

そう思って、学校で本田君を探していたら、朝、本田君と喧嘩していた女の子がキャッチボールをしていたんだよ！

続く

ドルフィンズに入るよ！

マナは、放課後本田吾郎を探しに学校中を回っていた。

マナ「もう帰っちゃったのかな。」

なかなか見つからなかったので、マナは下校することにした。

因みに、吾郎は屋上で清水薫とキャッチボールしたのだが、清水が全くボールを捕れない事に憤慨し、喧嘩になってしまっていた。

その翌朝

マナは一足早く学校に登校していた。

すると、

吾郎「一緒に野球をやろうぜ。面白さは俺が保証するよ。」

清水「つまんなかったらやめるぞ？」

吾郎「ぜってーおもしれーって！」

昨日喧嘩していた吾郎と清水が仲直りし、清水はドルフィンズに入るようだ。

マナ「ねえねえ！」

吾郎「なんだ？」

マナ「君が本田君？」

吾郎「うん、そうだけど。」

マナ「あたしもドルフィンズに入るよ！」
吾郎「本当なのか!?」
マナ「張り紙をみて、本当に困ってるみたいだから。」
吾郎「あはは・・・
実は他に野球をやってくれる奴が清水だけだったんだ。他は皆断られちゃった。
野球の面白さは俺が約束するから、チームに入ってくれないか？」
マナ「勿論だよ！」
清水「まあ、あの野球伝道師がいるから大丈夫大丈夫♪」
吾郎「あのな・・・
とりあえず、清水より運動神経が良ければなんとかなるから。」
清水「コラァ！」
マナ「あはは・・・

よろしくね！　本田君！　清水さん！」

こうして、マナもドルフィンズに入ることになった。

放課後

六花「えっ!?　私も！」
マナ「ねえ！　六花も一緒にやろうよ!!」
六花「しょうがないわね、わかったわ。
こういう時のマナは誰にも止められないからね。」
マナ「やった！」

マナの説得により、菱川六花もドルフィンズ入り。

マナ「えーと、ここで合ってるのかな？」

マナは、吾郎と、ドルフィンズの監督が経営している店、安藤スポーツ用品店でグローブを買うことになっていた。

マナ「えっ？
もう帰っちゃったんですか？」

安藤「ああ、２人とも帰っちゃったんだ。ちょっと色々とあってね。」

安藤が説明するには、

吾郎が清水を連れてきた→この際に吾郎のクラスメイトの小森が万引きしようとしていた→実は小森は万引きを強要されていたのではないかと吾郎達は推測、因みに、沢村は吾郎と鉢合わせになって取り巻き達と逃走→小森の事で吾郎と清水が口論になり、清水が帰ってしまい、吾郎も帰宅

ということらしい。

六花「小森君、ちょっと心配ね。」
安藤「えーと、吾郎くんから聞いているよ。相田さんと、こちらの子は？」
マナ「はい、あたし、相田マナです！
こっちは、クラスメイトの菱川六花です！
六花もあたしと一緒にドルフィンズに入ります！」

安藤は、喜んで２人に古いグローブをタダでプレゼントした。

その帰り道、早速グローブとボールでキャッチボールを始めたマナと六花。

マナはそれなりにできるのだが、六花は捕るのも投げるのもダメダメだった。

六花「難しいわね。」
マナ「でも、練習すればきっと上手になれるよ！」
六花「そうよね。

あっ。」

六花の投げた球はすっぽぬけて、マナの頭上を大きく越えていった。

ボールは点々と転がり、ベンチに座っていた少年の足元で止まった。

みんな友達だよ！

マナ「どうしたの？」

六花とキャッチボールをしていたマナは、ベンチに俯いて座る小森に声をかけた。

小森「君は確か、１組の。」
マナ「相田マナだよ！」
小森「ぼ、僕は小森大介。」
マナ「小森君だね。

ここで座ってどうしたの。」
小森「ううん、何でもないよ。」
マナ「そうは見えないかな？

何だか、悩んでいるみたいだけど・・・

ねえ、話をしようよ！」

そう言って、マナは小森から話を聞いた。

沢村からいじめられていることや、本田がドルフィンズのメンバー探しに奔走しているのをみて、野球が気になっている事などを話した。

マナ「そうなんだ。」
小森「僕、野球が好きなんだ。

でも・・・・・」

マナ「小森君も、ドルフィンズに入ろうよ！」

小森「え？」

マナ「小森君の話を聞いて、本当に野球が好きなんだなあと思って、」

小森「ダメだよ！」

マナ「え？」

小森「そんな事をしたら、相田さんにも迷惑がかかっちゃう！相田さんまで、沢村君に、」

マナ「大丈夫だよ！

あたし、どんなことがあっても、小森君を守るから！」

小森「相田さん・・・」

マナ「だから、明日本田君に勇気を持って言おうよ！一緒に野球をやろうと！きっと本田君や清水さんも迷惑だと思わず、味方になってくれるよ！」

小森「・・・・・

ありがとう相田さん。

僕、頑張ってみるよ！」

こうして、小森と別れたマナと六花は家路へ。

余談だが、マナの自宅は、ぶたのしっぽ亭という洋食屋である。

夕食の時に、

マナ「あたし、野球をやろうと思うんだ。
三船ドルフィンズってチームで。」

マナパパ「そうか、頑張れよ。」
マナママ「怪我しないように気をつけてね。」

一応、両親は賛成してくれた模様。

その翌日

マナ「遅刻だーーーーーー!!!」
六花「マナが寝坊したからでしょーーーー!!!」

寝坊してしまい、遅刻寸前のマナと六花（六花は寝坊したマナをギリギリまで待っていた）。

マナ「セーフ（汗）」
何とかギリギリ間に合った。

その日の休み時間。

マナは吾郎に呼ばれて、六花を連れて屋上へ向かった。

マナ「よかったね小森君。」
小森「相田さんのお陰だよ。」
清水「小森から聞いたぞ。昨日相田に励まされたこと。」
マナ「困っている人がいたら、あたしは絶対に助けるのが信念みたいなものだからね。」

本田「なんかすげぇ信念だな。」
清水「人助けか。相田もやるじゃん！」
六花「まあ、それがマナだから。」
吾郎「で、君は？」

マナ「この子は菱川六花、あたしがドルフィンズに入ろうと誘ったの。」
六花「よろしくね。」

こうして、３人の実力を簡単にチェックすることになった。

吾郎「すげえぜ小森！」
清水「あんた天才かよ!?」
小森「うん、よくお父さんとキャッチボールをしてたから。」
マナ「だからって、こんな速い球を捕るなんて凄いよ！」
吾郎「次は相田だな。」
マナ「うん！　お手柔らかに。」

吾郎「とりあえず相田、小森に投げてみてくれ！」
マナ「わかったよ。」

マナの投げた第１球は、

パ～ン！

吾郎ほどではないが、速い球だった。

吾郎「すげえよ相田！　本当にはじめて野球やるのか!?」
マナ「う、うん。
昨日キャッチボールをしたけど。」
清水「何者だよ小森と相田は!?」

吾郎「小森と相田・・・

これはドルフィンズは強くなるぞ！」

この後、六花がキャッチボール等をしてみたが、

六花「・・・」ズーン

吾郎「まさか、清水並みの運動音痴がいるとはね。」
清水「失礼な！
私は縄跳び１２０回飛べるし！」

小森「で、でも、清水さんや菱川さんも練習すれば上手くなるよ。」
マナ「そうだよ！　小森君の言うとおりだよ！」

その放課後

六花は塾があるので早々に下校し、マナは1人で壁当てをしようと教室を出たところ、隣の教室をみて気になることが。

沢村が1人で呆然と席に座っていた。

マナ「あ、あの・・・

確か君は、小森君の」

すると、沢村は席を立ちどこかへ行こうとする。

マナ「待って！」

沢村「お前も小森の事を文句を言いに来たんだろ！」

マナ「そうじゃないよ！」

沢村「!?」

マナ「確かに、沢村君が小森君をいじめたのはいけないことだと思う。

でも、どうしてそんな事をしたのかを聞かないと、あたしは文句をいう事は出来ないかな。」

沢村はマナに、小森をいじめていたことや、今日のあの出来事を話した。

沢村「俺、最低だよな・・・・・

軽い気持ちで小森を傷つけてたんだよ。

俺、アイツに言われなかったら一生気づかなかったのかもしれない

な。
本当に酷いことをしていたんだな俺。」
マナ「だったら謝らないと！」
沢村「え!?」
マナ「いけないことをやったのなら謝らないといけないよ！」
沢村「わかってる・・・・・
わかってるけど！
アイツは、許してくれないだろうな。」
マナ「そんな事は謝ってから考えてよ！」
沢村「!?」
マナ「沢村君の謝りたいって気持ちを伝えたら、きっと許してもらえるよ！
小森君にその思いを伝えようよ！」
沢村「っ！」
マナ「沢村君!?」
沢村「俺、小森を探してくる！
またな！」
覚悟を持った面持ちで、沢村は教室を出ていった。
マナ（頑張ってね。　沢村君。

今度こそ、小森君と本当の友達になれるはずだよ。）

屋上

沢村「ごめん、小森・・・」

こうして、沢村は小森と和解し、ドルフィンズへ入った。

吾郎曰く、後日やる商店街チームとの試合に勝たないとドルフィンズは解散となる。

果たして、吾郎達はドルフィンズを救えるのか!?

ドルフィンズを守るよ！　（能力紹介あり）

「明日試合ーーー!!?」

吾郎「ああ、そうだけど。」

沢村「そうだけどじゃねーだろ！」

小森「商店街チームって、この前の草野球大会でも2位なんだよ。」

清水「本当に大丈夫なのか!?」

吾郎「任せろって、俺が全部三振とって、俺がホームランを打てば勝てるから。」

マナ「本当に大丈夫かな・・・？」

六花「本田君の球が速くても、大人相手だから。」

吾郎「大丈夫だって！

俺の球はおじさん相手に打たれるかよ！」

マナ「だと、いいけどね。」

吾郎「あ、そうだ！

お前達放課後ひま？」

吾郎以外「？」

吾郎「学校終わったらバッティングセンターいこうぜ。

小遣いは用意しておけよ。」

ここにいる全員が暇だったので、放課後バッティングセンターへ。

マナ「ここがバッティングセンターなんだ。」

六花「初めて来たけど広いわね。」

こうして、バッティングセンターでの特打ちが始まった（吾郎と小森の挑戦は割愛）。

沢村の場合（１００ｋｍに挑戦）

沢村「くっそー！
何で当たらないんだ!?」

吾郎「力みすぎだ！
肩の力を抜いて振ってみろ。」

沢村「わかった。」

吾郎のアドバイス通りにやると。

カーン！

沢村「当たった！」
小森「沢村君凄いよ！
アドバイスを受けてすぐに出来たんだから！
タイミング良くミートすれば、もっと強い打球を打てるようになるよ。」

結果　前へ打球が飛ぶようになった

マナの場合（９０ｋｍに挑戦）

マナ「あれっ？　当たらないな。

そうだ！　沢村君と同じように肩の力を抜いて振ってみよう。」

すると、

カキーン！

小森「凄い！　鋭い打球を打つなんて！」

更に、

カキーン!!　コンッ！

アナウンス『おめでとうございます！
ホームランです！』

清水「ウソーーーー!!!?」
小森「凄すぎるよ!!?」
沢村「本当に初心者か!!?」

結果　野球センス、とんでもなく高い（念のため言っておきますが、マナは初心者でバットをちゃんと握ったのも初めてです）

六花の場合（７０ｋｍに挑戦）

カツン

最初は空振り連発も徐々に当たるようになった。
六花「当たるけど前に飛ばないわね。」
小森「体全身でスイングしてないからだと思うよ。」

腕振りになっているのを指摘され、体全身のスイングを意識すると。

カーン！

前に飛ぶようになった。

吾郎「菱川、結構ボールがみえてるな。」
六花「多分、競技かるたをやっているからかしら。競技かるたは、動体視力や反射神経が重要だから。」

結果　バットに当てる事ができた

清水の場合（７０ｋｍに挑戦）

清水「なあ本田！　アドバイスとかあるの？」
本田「バット持ってからコインを入れること。以上！」↑別のケージ（１２０ｋｍ）の方へ

清水「ちょ、おーーーい!!?」

清水「なんだよあいつ！」
文句を言いながら、清水はコインを入れてバットを取りに行こうとした。

小森「し、清水さん！」
清水「え、どうしたのこも、
うぎゃあああああ!!!?」

投手側から投げ込まれたボールが清水の腰に直撃。

小森「だから本田君が言ったじゃない。」
清水「しょ、しょーいうことだったのね・・・・・」

結果　バットに当たらなかった

こうして、吾郎達はバッティングセンターで打ち込んだ。
いよいよ明日、運命の試合が始まる。

※能力紹介

本田吾郎
右投げ右打ち
ポジション　投手
サブポジション　外野手◎
フォーム　オーバースロー
投手能力
球速　１１０ｋｍ
コントロール　Ｂ
スタミナ　Ａ
変化球　なし
特殊能力　対ピンチＢ　ノビＡ　奪三振　闘志　尻上がり
野手能力
ミート　Ｃ
パワー　Ａ
走力　Ｂ
肩力　Ａ
守備力　Ｂ
捕球　Ｂ
特殊能力　パワーヒッター　逆境○

相田マナ
右投げ右打ち

ポジション　外野手（暫定）
サブポジション　投手（暫定）
フォーム　手投げ
野手能力
ミート　Ｅ
パワー　Ｃ
走力　Ｃ
肩力　Ｂ
守備力　Ｅ
捕球　Ｅ
特殊能力　逆境○　意外性

投手能力
球速　７０ｋｍ
コントロール　Ｆ
スタミナ　Ｃ
変化球　なし（但し、ストレートがムービング変化）
特殊能力　なし

清水薫
右投げ右打ち
ポジション　外野手
野手能力
ミート　Ｇ
パワー　Ｇ
走力　Ｇ
肩力　Ｇ
守備力　Ｇ
捕球　Ｇ
特殊能力　三振　意外性

菱川六花
右投げ右打ち
ポジション　外野手
野手能力
ミート　F
パワー　G
走力　G
肩力　G
守備力　G
捕球　G
特殊能力　意外性

小森大介
右投げ右打ち
ポジション　捕手
野手能力
ミート　D
パワー　D
走力　C
肩力　C
守備力　B
捕球　B
特殊能力　チャンスB　キャッチャーC

沢村涼一
右投げ右打ち
ポジション　外野手
ミート　F
パワー　E
走力　A
肩力　E

守備力　Ｄ
捕球　Ｅ
特殊能力　意外性

前原
右投げ右打ち
ポジション　遊撃手
ミート　Ｆ
パワー　Ｆ
走力　Ｄ
肩力　Ｅ
守備力　Ｅ
捕球　Ｆ
特殊能力　バント○

長谷川
右投げ右打ち
ポジション　二塁手
野手能力
ミート　Ｆ
パワー　Ｆ
走力　Ｃ
肩力　Ｅ
守備力　Ｅ
捕球　Ｅ
特殊能力　なし

田辺
右投げ右打ち
ポジション　一塁手
野手能力

ミート　Ｆ
パワー　Ｅ
走力　Ｅ
肩力　Ｅ
守備力　Ｅ
捕球　Ｄ
特殊能力　なし
夏目
右投げ右打ち
ポジション　三塁手
野手能力
ミート　Ｆ
パワー　Ｅ
走力　Ｅ
肩力　Ｅ
守備力　Ｅ
捕球　Ｆ
特殊能力　なし

鶴田
右投げ右打ち
ポジション　外野手
ミート　Ｆ
パワー　Ｆ
走力　Ｅ
肩力　Ｅ
守備力　Ｅ
捕球　Ｅ
特殊能力　なし

みんなで試合だよ！

グラウンド

ユニフォームを来た既存メンバー5人と新たに加わった沢村、清水はグラウンドで待っていた。

そこに、ワゴン車が来た。

ワゴン車から出てきたのは、

ユニフォームらしきものを運んでいた吾郎と小森、すでに赤と青をベースにしたユニフォームらしきものを着ていたマナと六花だった。

吾郎「おーいみんなー！
これに着替えてくれ？」

沢村「ユニフォームか？」

監督「ああ、
実はずっと押し入れにしまったままだったんだ。いつか試合ができる時の為に。
皆、悔いなくこの試合をしよう！」
吾郎「何言ってんだよおじさん！
勝って、ドルフィンズを存続させるんだ！」

こうして、他のメンバーもユニフォームに着替えた（清水はワゴン車の中で着替えた（マナと六花が清水を隠しながら））。

オーダーはご覧のとおり

４　長谷川
６　前原
２　小森
１　本田
５　夏目
３　田辺
７　鶴田
８　沢村
９　相田
控え　清水　菱川

じゃんけんの結果、ドルフィンズ先攻で試合開始となった。

三船ドルフィンズ（先攻）ｖｓ三船アタックス（後攻）

１回表

１番の長谷川、２番の前原は三振に倒れる。

吾郎「何やってんだよ！」

吾郎は２人に叱責する。

小森「逆に遅すぎて、打ちにくいんだよ。」

大人チームのピッチャーは２人にスローボールを下手投げで放っ

ていた。

次のバッターは小森、こちらはヒットを打つ。

そして、４番本田吾郎。

カキーン!!

会心の当たりはグングンと伸びていき、フェンスの外へとボールは飛んでいった。

マナ「凄い・・・！
ホームランをみるなんて初めてだよ！」

マナは驚きと感激で一杯だった。

続く夏目は凡退し、その裏、

１回裏（その回の途中から桃子もベンチで観戦）

自信満々の表情でマウンドに上がった吾郎だったが、守備の乱れで同点に追い付かれた。

沢村「おいおい内野陣集まったぞ。」
マナ「ちょっと行ってみるよ。」

マナが内野陣の輪の中へ入ってみると、

前原「1人でやってろよ。

天才野球少年。」

ノーアウトなのに、内野陣の殆どがベンチへ引き上げようとしていた。

マナ「ちょ、ちょっと待って！

みんなどうしたの!?」

マナが吾郎や前原達に理由を聞いたところ、

吾郎がエラーを連発する内野陣にきつく当たり、それに前原達が反発したのだ。

吾郎「あんな下手くそな奴らをバックにピッチャーなどやってられるか!!」

前原「こっちだって、あいつと試合なんかできるかってんだよ！」

マナ「・・・・・」

吾郎「あいつらが下手だからこうなったんだよ相田。」

マナ「それは、本田君が間違ってるよ。」

吾郎「！」

マナ「だって、野球は9人でやるスポーツでしょ。

その9人の思いがバラバラだと、絶対に勝てないよ。」

吾郎「そんな事、素人のお前に言われなくたってわかってるよ！」
マナ「わかってないよ！」
吾郎「!?」
マナ「わかっていたら、チームメイトにやつあたりなんてしないよ！
皆が力を合わせないと、負けちゃうんだよ！
ドルフィンズは終わっちゃうんだよ!!
本田君はそれでいいの!!?」
吾郎「・・・・・」
内野陣「・・・・・」
確かに正論である、吾郎はマナになにも言い返せない。
大人「おーい、長いぞー。」
マナ「すみません、もうちょっと時間をください。」
大人「わかった。今回は特別だぞ。」
マナ「ありがとうございます！」
前原達が再びマウンドに集まり、マナもその輪に加わる。
小森「完全に大人チームのバッターは皆、本田君の球が見えている。」
吾郎「それなんだよ。

多分、俺の球が大人達に合ってるんだ。」
マナ「じゃあ、どうするの？」
吾郎「相田、投げてくれないか？」

吾郎はマナにボールを差し出した。
マナ「・・・え？」
吾郎「俺の投げる球より速くないけど、逆にそれがいいのかもしれない。」
小森「この前投げてたらコントロールは悪くなかったから大丈夫だよ！」
マナ「あたしにできるかな・・・？」
吾郎「頼む！
大人達を抑えられるのは、もう相田しかいない！」

吾郎は、マナを信じるという目をしていた。
マナ「わかった。」
吾郎「俺は、外野で休んどくよ。」

マナは吾郎からボールを受け取った。
マナ「小森君、あたし、何もわからないから、どうすればいいのかな。」
小森「相田さんは、おもいっきり僕のミットめがけて投げれば大丈夫だよ。」
マナ「わかった。

内野の皆も、打たれたときはよろしくね！」

前原「お、おう。」
夏目「任せろ。　まあ、エラーした俺達が言っても説得ないけどな。」

大人「ピッチャー交代か。」
大人「おいおい、女の子が投げるぞ。」
大人「しかも、フォームがめちゃくちゃだぞ。」
大人「そんなフォームでキャッチャーのミットに届いているからな。地肩はいいんだろうな。」

試合再開　2―2　ノーアウト　ランナー2塁、1塁
本田　ピッチャー→ライト
相田　ライト→ピッチャー

マナ（とにかく、迷わずに、小森君のミットにおもいっきり投げるだけ！）

ビュッ！

主審「ストライーク！」

ほぼ手投げながらもストライクゾーンへ投げ込んだ。
バッター「遅いな。
さっきのボウズの球より打ちにくいかもな。」

第2球目

コツン！

打球はサードの前へ、

ボテボテのゴロを夏目は冷静に捕って1塁へ。

塁審「アウト！」

小森「ナイスサード！」
バッター「やはりタイミングは取りづらいな。」

次のバッターはキャッチャーフライに、さらにその続くバッターをショートゴロに打ち取った。

ベンチへ戻る際、

「ごめん！」
吾郎が前原達に頭を下げた。
吾郎「俺、勝ちたいって思いばかり先走って、全然回りが見えてなかった。
でも、相田をピッチングをみて気づいたんだ。
自分のことしか考えず、バックを信じないなんて、俺、ピッチャー失格だよ・・・」
マナ「本田君・・・」

前原「ま、まあ、俺達もちょっと熱くなりすぎたかな？」
夏目「お互い様だよ。俺達のエラーも悪いわけだし。」
長谷川「次は絶対にエラーしないとは言えないけど、下手なりに体を張ってでも止めてみせるよ。」
田辺「だからさ、頭を上げてくれよ。」

吾郎「皆・・・
ありがとう・・・！」

桃子（良かったわね吾郎。　いい友達に出会えて）
桃子は、吾郎がいい仲間に出会えたことを嬉しく思っていた。

長谷川「それにしても、すごいぜ相田！
大人相手に打ち取るなんて。」

マナ「ううん、皆のお陰だよ。」

鶴田「でも、次の回以降も同じように抑えられるのかな？」

マナ「大丈夫だよ！
本田君がいるんだから。」

吾郎「え？」

マナ「皆もそれでいいよね。」

沢村「ああ、あいつしかいないよな。」
前原「まあ、本田を信じることにすっか。」

吾郎「皆、
今度は絶対に抑えるから、力を貸してくれ！」

メンバー「勿論だよ！」

こうして、バラバラになりかけるも、1つのチームとして結束したドルフィンズ。

試合は、まだ初回が終わったばかりだ。

雨にも大人にも負けないよ！

三船ドルフィンズ対三船アタックスの試合

初回が終わって、２―２の同点。

２回は、共に３人で攻撃は終了した。

３回表

この回の先頭はマナ。

投手「おっ、さっきマウンドに上がった子か。
さあ、打てるかな？」

下手投げで手加減した球を放る。

ブンッ！

主審「ストライーク！」

吾郎「力みすぎだ！　肩を力を抜け！」
マナ（そうだった。　昨日の練習通りに、）
吾郎の指摘を意識して２球目の球を打った。

カキーン！

鋭い打球だったがレフトライナー。

マナ「うー、悔しい！」
吾郎「仕方ないって、でも、次は絶対打てる！」

投手（やるな。

だが、お遊びはここまでだ）

しかし、2順目に入り、本気の投球の始めた投手の前に連続三振に倒れる。

その直後、雨が降りだした。

試合は続行となるも、その裏の大人チームの攻撃で、

主審「ボール！　フォアボール！」

1アウトからフォアボールでランナーを出塁させると、

雨で手が滑るのかワイルドピッチやフォアボールで1アウト1塁、3塁のピンチを背負う。

吾郎（ここで点を取られたら、ウチに勝ち目はない！
絶対に打ち取って）
ビュッ！

吾郎「しまった！」

雨で手が滑り、コースは真ん中へ、

カキーン！

大きな打球がライトへ、

マナ（絶対に捕る！

絶対に!!）

ガシャン！

六花「マナ!!」

吾郎「相田!!」

塁審「アウト!!」

フェンスに激突しながらも、マナは打球をキャッチした。

だが、

主審「ホームイン！」

タッチアップで3塁ランナーが帰還。ドルフィンズは一点を追う展開になる。

沢村「大丈夫か!?」

マナ「だ、大丈夫だよ・・・」

マナは起き上がって、手でユニフォームについた泥を落とした。

吾郎（相田の奴・・・

無茶しやがって・・・！

でも、

あいつの頑張り、

無駄にするもんか!!!）

マナのファインプレーで、吾郎の闘志に更に火が着いた。次のバッターを３球三振に打ち取った。

４回の裏

この回は小森からの打順だったが、

その小森はショートフライに倒れる。

続く４番吾郎。

カキーン！

２球続けて鋭い打球が飛ぶが惜しくもファール。

捕手（こうなったら、）

投手（あの球をいくか）

大人チームの投手は、サインを受けてからの第３球。

ビュッ！　ククッ！　ズバーン！

主審「ストライーク！
バッターアウト!!」

吾郎「カ、カーブ・・・・！」

沢村「こんな球を持ってたのかよ!?」
マナ「そんな・・・・・」
続く夏目も三振に倒れ、重苦しい空気のドルフィンズベンチ。

しかし、嘆いていても、守りに付かなくてはいけない。

マナ「皆！
とにかく、最後まで諦めずに頑張ろうよ！」

吾郎「そうだよな。
皆！　まだ試合は終わってない！」

ドルフィンズ「おーーーー!!!!」

しかし、雨足は強まっていき、

５回表、３人で凡退し、完全に本降りになっていたのもあって、立会人でもあった沢村の父（サッカーチームの監督をしている）がゲームセットを提案したところ、

沢村父「お、おい！
何で準備してるんだ!?」

打者「監督に行けって言われましたんで。」
沢村父「どういうつもりですか監督!?」

大人監督「一点差だし、それに、ウチの点の取り方も納得いくものでもなかったからな。」

投手「おーい、ボウズ達、
早く守備につけよ。

パンツまで雨で濡れちまうぞ。」

吾郎「・・・う、うん！」

大人チームの監督や選手達の粋な計らいもあって、予定の６回まで試合をすることになった。

これが、ドルフィンズに追い風が吹いた。
その回の吾郎は、完全に大人チームの打者を抑え込んでいた。

その時の大人チームのベンチでは、
選手「おい、おまえＭＡＸでなんkm出したことあるか？」
大人チームの選手の１人がピッチャーに聞いていた。
投手「俺が三船の怪物と言われていた頃は１３０ｋｍは出てたかな。
まあ今じゃ１１０ｋｍが限界かな。」

選手「多分今投げているボウズ、
それくらい出ているぞ。」
投手「何っ？」

ズバーン！

主審「ストライーク！　バッターアウト!!

スリーアウト、チェンジ!!!」

選手「多分、今日最高のボールだったんじゃないんか？」
選手「ここに来て、肩が暖まったってか。」
選手「あのボウズ、本当に凄いな。」

いよいよ最終回、先頭はマナ。

マナ（この回、逆転しないといけない。
小森君や本田君に打順を廻すには、まずあたしが塁に出ないといけない。）

捕手（あと、アウト3つ。しっかりと締めましょう！）
投手（ああ）

ビュッ！　ズバーン！
主審「ストライーク！」

マナ（速い！
でも、これを打たなきゃいけない。

皆で一緒に、）

ビュッ！

マナ（野球がしたいから!!）

カーン！

捕手「サード！」

マナの打った打球は3塁線へ。

しかし、

三塁手（す、滑る！）

ダダダッ　ダ！

塁審「セーフ！」

ぬかるんだグラウンドにサードが足をとられ、送球が逸れ、マナが出塁。

清水「やった！」

六花「ランナーが出たわ！」

三塁手「すみません！」

投手「ドンマイドンマイ。気にするな。」

しかし、続く長谷川はキャッチャーフライに倒れる。

続くバッターは前原。

ビュッ！　ズバーン！

主審「ストライーク！」

前原（打てっこねーよ・・・

けど、俺には、）

ビュッ！

前原（あれがあるんだよ!!）

コーン！

投手「お、送りバント！」

ダダダダッ！

捕手「ファースト！」

スバン！

塁審「アウト！」

意表をついて、得意技である送りバントを決めた前原。ツーアウトだが、得点圏にランナーを進めた。

小森「ナイスバント！」

前原「絶対に、本田に繋げよ。」

小森「うん！」

後のないドルフィンズ。しかし、ここで小森が繋げば、吾郎に打順が廻る。

カーン！

カーン！

墨審「ファール！」

カーブを織り混ぜる大人チームの投手のボールに小森は食らいつき、フルカウントに。

そして、

ビュッ！　ズバーン！

主審「ボール！　フォアボール！」

投手「ちっ！
手が滑ったな。　」

夏目「よしっ！　これで本田に打順が廻った!!」
沢村「頼むぞ！　本田!!」
清水「いっけー！」
六花「頑張って！」

チームメイトの声援を受け、吾郎、３回目のバッターボックスへ。

と、ここで、

投手「タイム！」

大人チームの投手が手とボールを拭きに一旦ベンチへ向かった。

投手（久し振りに、燃えてきたじゃねえか。勝負だ、ボウズ！）

主審「プレイ！」

投手がマウンドへ戻り、試合再開。

その初球。

ビュッ！　カーン！

墨審「ファール！」

沢村「打てるぞ！」

清水「本田！」

２球目、

ビュッ！　カーン！

墨審「ファール！」

２球で追い込まれた吾郎。しかし、ストレートはほぼタイミングが合ってきている。

捕手（次にストレートで行くのは危険だ。

カーブでいくぞ！）

捕手のサインに首を縦に振る投手。

投手（ボウズ、お前達の野球への思いは、充分伝わったぜ。
けどよ、俺達もそう簡単に負けるわけには、）

ビュッ！

投手（いかねえんだ!!）

吾郎（絶対に打つ！
チームの為に!!
みんなの為に!!!）

カキーン！

渾身のカーブを打った吾郎。
その打球は、

三遊間を破っていった。

吾郎「突っ込め！　相田!!」

捕手「バックホームだ!!」

マナは一気にホームへ、

マナ（セーフになる！

絶対セーフになるんだ!!）

そして、

ズサー!!

クロスプレーの行方は・・・

主審「アウト！
ゲームセット!!!」

三船ドルフィンズ　2―3　三船アタックス

マナ「負け・・・た。」
吾郎「・・・・・」
マナ「ごめん、本田君・・・」

吾郎「いいんだよ。　相田は本当に頑張ったよ。」

マナ「うっ、うぐっ・・・」

マナは涙を堪えることで精一杯だった。

投手「ナイスバッティング！
良い試合だったぜ。
次はもっと良い天気で試合やろうな。」

吾郎「もう無理だよ。

ドルフィンズはもう、終わりなんだから・・・」

投手「バカ言ってんじゃねーよ。
誰がそんな事を決めたんだよ。」

吾郎「・・・え？」

投手「こんな熱いガキ達にグラウンドを取り上げようなんて、商店街のジジイもどうかしてるぜ。」
捕手「ああ、沢村さんが反対しても、俺達はみんな、お前達の味方するからな。」
選手「そうだよな。」
選手「だな。」

沢村父「おいおい、私だけ悪役にするつもりかね。

そんなに、野球は面白いのかね？」
沢村の父の問いかけに、

マナ「はい！

あたし、今日初めて野球をしました。

投げたり、打ったり、捕ったり、走ったりするの、

とっても楽しかったです！

だから、

もっと野球がしたいです!!!」

元々は、ドルフィンズが困っているから助けたいという思いでドルフィンズに入ったマナ。

しかし、この試合を通じて、野球の面白さに、完全に虜になっていた。

沢村父「・・・・・ふぅ。

まあいい、グラウンドの事については、私は掛け合ってみよう。」

吾郎「・・・・・！」

マナ「ほ、本当ですか・・・・！」

「やったーーー!!!」

吾郎「みんな・・・

ありがとう・・・・！」

吾郎の涙腺は、もう誰にも止めることができなくなっていた。

監督「よく頑張った・・・！」

マナ（よかったね、本田君・・・）

両チーム整列の時には、雨は止み、虹が出ていた。

初練習だよ！

グラウンド

監督「今日から、新生ドルフィンズがスタートする！」

先日の試合を経て、無事にグラウンド使用が認められたドルフィンズ。その初練習とあって、吾郎達は嬉しそうだ。

ランニングから始まり、キャッチボール、ノック、素振りなどを行った。

吾郎と小森以外はまだまだ初心者というのもあって悪戦苦闘しているようだ。マナもノックではミスを連発した。

対照的に2人は流石の動きを見せている。

六花「やっぱり本田君と小森君は上手ね。」

マナ「そうだね。

でも、いっぱい練習すれば、あたし達も上手くなれるよ。」

六花「そうね、頑張りましょう。」

ノックをした後の休憩時間の時、

吾郎「相田！

ちょっと来てくれないか。」

相田「どうしたの？」

吾郎に呼ばれて、マナが来てみると、

マナ「あたしがピッチャー!?」

吾郎「うん。
この前の試合をみて、思ったんだけど、

練習すれば、もっとすごい球を投げられると思うんだ。」

マナ「でも、ピッチャーは本田君がいるから、あたしが投げなくてもいいんじゃないのかな?」
吾郎「いや、おじさんがさ、
リトルリーグの大会だと、同じピッチャーが続けて投げることに制限がかかるんだって。
だから、もう一人ピッチャーが必要なんだ。」

マナ「あたし、できるかな?」
小森「大丈夫だよ!
この前の試合のフォームで投げて抑えたんだから、しっかりとしたフォームを作って練習すれば、凄い球を投げられるかもしれないよ。」

こうして、マナはピッチング練習をすることに。

投球時のフォーム等を吾郎に指導やアドバイスを受けたマナ。

そして、マナが投げた1投は!?

ズバーン!

小森の手が痺れるほどの直球が小森のミットに収まった。

吾郎「すげえよ相田！　これなら充分通用するよ！」
小森「相田さんの球を受けたら、左手が痺れちゃったよ。」
マナ「え!?　そうなの小森君!?　ごめん。」
小森「いいんだよ、こんな凄い球を受けられて、とても嬉しいから。」

その光景をしていた監督は、

監督（やはり、吾郎君はドルフィンズにいるより、もっと強いチームにいた方がいいのではないだろうか。
それに、相田さんもセンスが非常に高い。このまま、ドルフィンズにいるのは勿体ないかもしれない。
しかし、野球未経験の彼女がいきなり名門にチームに入るのは荷が重いかもしれない・・・
うーん、この辺りは難しいぞ。）

その後練習が終わったあと、吾郎とマナは監督に呼ばれた。

マナ「横浜リトル？」

監督「ああ。
２人の実力をみる限り、もっと強いチームに入れば、もっと上手くなるかもしれない。」

吾郎「興味ないね。折角、メンバー集めてドルフィンズを建て直したのに、他所にいくはずないじゃん。」
監督「吾郎君、君はプロ野球選手を目指しているんだろ!?
だったら、プロを目指している子供達が沢山いるチームに入って、共に実力を磨いた方がいい。
プロに入る最高の環境が横浜リトルにはあるんだ！」

マナ「あ、あたしはあんまりプロとかそういうのは全くわからないんですけど・・・」

監督「相田さんも、強いチームに入ってもっと上手くなるかもしれないよ。

まあ、２人とも、電車賃は渡すから、見学へ行ってきなさい。１度みてみるだけでも損はないと思うよ。」

こうして、吾郎とマナは、横浜リトルの練習グラウンドへ向かった。

そこで２人は、２つの出会いをする。

番外編　ｓｉｄｅ―Ｙ　わたしの野球との初対面

日曜日の横浜リトルのグラウンド

グラウンドの周りをたまたま散歩していたのは、坂上あゆみ。横浜の学校に通う４年生の女の子だ。

そこに、

あゆみ「あれ？

ボールだ。」

グラウンドから転がってきたボールをあゆみは拾った。

そこに、

???「ちょっと君！

ここにボールが転がってこなかった。」

あゆみ「は、はい！

これですか？」

???「ありがとう。

悪いけど、そのボール、投げてくれるかな。」

あゆみ「は、はい！」

あゆみがおもいっきり投げた。

ビュッ！　ズバーン！

相手の子のグラブに大きな音が鳴った。

???「凄い球を投げるね！」

あゆみ「そ、そうですか・・・？」

???「どこのチームに入っているの？」

あゆみ「え、チームって何ですか？」

???「もしかして、野球やったことないの？」

あゆみ「え、ええ。」

???「ごめん、名前を聞いてなかったね。

僕は佐藤寿也。君は？」

あゆみ「さ、坂上あゆみです。」

寿也「あゆみちゃん。

いい名前だね。」

???「おい、佐藤！

ボールは見つかったか!?」

寿也「はい！

見つかりました！

直ぐに戻ります！

ごめんね。

まだ、練習があるから。　またね。」

あゆみはただ1人、ポツンと立っていた。

あゆみ（佐藤寿也君・・・

わたしと違って、とても活発で、はつらつとしていて）

あゆみにとって、寿也は別世界の人間のように思われていた。

しかし、数日後に思わぬ形で再会することになるのだが・・・

練習後、寿也がチームメイトと話をしていた。

寿也「そういえば、ボールを拾いに行った時、拾ってくれた女の子が僕に向かって投げたら良い球を投げていたんだ。」

???「ホントなのか？」

寿也「ホントだって！

確か、坂上あゆみって言ってたかな。」

それを聞いた監督らしき人は、

???「坂上・・・

もしや・・・・・」

数日後

あゆみの家

あゆみパパ「あゆみ、この間横浜リトルの監督に会ったのか。」

あゆみ「ううん、監督って人には会っていないけど、そのチームにいる子には会ったよ。」
あゆみパパ「そうか・・・
実は、その監督が日曜日にグラウンドに来てほしいようだ。」
あゆみは言われるがままに、日曜日、横浜リトルのグラウンドにいた。
???「君が坂上あゆみさんかな？」
あゆみ「は、はい！」
突然、サングラスをかけた男性があゆみに声をかけた。
???「早速だが、マウンドで投げてもらう。」
あゆみ「え？　マウンドって・・・」
???「二度も同じことは言わないぞ！
早く行くんだ。」
あゆみ「あの、マウンドはどこですか？」
???「な!?」
彼は驚くしかなかった。まさか、マウンドがどこかという事を説明しないといけない相手だとは思っていなかったからだ。
???「ピッチャーが投げる場所だ！
それならわかるだろう？」
あゆみ「あ、はい！」

流石にあゆみもわかったようだ。

???「佐藤！

準備をしろ！」

寿也「はい！」

あゆみ「佐藤・・・

もしかして、この間の子!?」

寿也「あ、今日テストする子って、この間の子だったんだ。」

あゆみ「え、どういうこと・・・」

???「取り敢えず1球投げてもらう！

佐藤のミット目掛けて、おもいっきり投げてみろ！」

あゆみは言われるがままに、マウンドへ立ち、寿也のミット目掛けて投げた。

ズバーン！

???「!?」

ベンチでみていた横浜リトルのメンバーは、

???「ぷっ！　何だこのフォーム。」

???「素人か？」
???「こんなのをテストするなんて監督は何を考えてるんだろうな。」
???「だが、そんなフォームでこの球を投げてるんだぞ。
練習を積めば、お前達投手も危うくなるかもな。」
???「じょ、冗談は止してくださいよ真島さん！」
あゆみの素人のフォームをバカにする者もいれば、逆に凄さを感じる者もいた。
???「よし、良いだろう。」
???（完全にフォームはバラバラ、しかし、そこから投げ込まれるボールは力があった。しっかりと基礎を固めれば、更に良いボールを投げられるだろう）
???「よし、合格だ！」
あゆみ「え？　合格・・・？」
???「良い球だった。
お前にやる気があるのなら、我が横浜リトルのユニフォームを袖に通して貰おうと思う。」
あゆみ「え!?
でも、わたしなんか野球何て全く知りませんし、わたしなんかが、」
???「そう言うことは聞いていない！」
あゆみ「!?」
???「お前が野球を知っているどうかはどうでもいい。

ただ、ここで野球をやるかどうかを聞いているのだ。」

あゆみ（わたしに、できるのかな・・・）

???「お前なら、練習を積めば、良いピッチャーになれるかもしれない。

そうなりたいかどうかは、お前次第だ。」

あゆみは心が揺れ始めていた。

あゆみ（わたし、今まで、なんの取り柄もない子だと思っていた。

でも、その野球の中に、本当に自分がいるのかもしれない。

どうなるかわからないけど、野球を通じて、

わたし自身を変えてみたい！）

あゆみ「はい！

宜しくお願いします！」

???「良い返事だ。

私は、横浜リトルの監督の樫本だ。

来週から、横浜リトルのユニフォームを着て、この練習してもらう。」

あゆみ「は、はい！」

すると、キャッチャーをした寿也もあゆみの元へ。

寿也「これから宜しくね。」

あゆみ「え、ええ。
宜しくね、佐藤くん。」

こうして、横浜リトルの一員となったあゆみ。
果たして、厳しい練習の末に、彼女は何を見つけるのか。
それは、彼女しか知らない。

横浜リトル？

安藤監督に勧められて、横浜リトルの練習場へ行くことになった吾郎とマナ。

こうして、横浜リトルのグラウンドに到着した。

グラウンドでは、横浜リトルの選手達が紅白戦をやっていた。

マナ「凄い・・・

みんな横浜リトルの子達なのかな。」

吾郎「そりゃそうだろ。横浜リトルのユニフォームを着てるんだから。」

マナ「皆上手よね。」

吾郎「そりゃ名門だからね。」

マナ「何とかさっきからどうでも良さそうな感じだけど。」

吾郎「当たり前だろ。

だって、横浜リトルに入る気なんてさらさらないし。」

マナ「あはは・・・」

この横浜リトルの紅白戦、

マナ「あれ、セカンドの子って、女の子じゃない？」

吾郎「ホントだ。

名門という割には、人材不足なんかね。」

マナ「本田君、そんなに嫌なら帰る？」

マナが吾郎に言ったその時、

カーン！

パシュ！　シュッ！

墨審「アウト！」

シュッ！

墨審「セーフ！」

セカンドの女の子が、外野へ抜けそうな球を横っ飛びでキャッチ。ファーストランナーをアウトにしたのだ。

だが、

???「ショート！
カバーが遅いぞ!!」

ショートの子「すみません！」

椅子に座っているサングラスをかけた監督らしき人に喝を入れられていた。

吾郎「俺、こういう威張った監督嫌いなんだけどなあ。」

マナ「た、確かに厳しそうな監督だね・・・」

吾郎「でも、あのセカンドはかなりやるみたいだ。」

吾郎は帰る気満々だったが、セカンドの子のファインプレーから試合を食い入るように観ていた。

更に試合は続き、

カキーン！

吾郎と同じくらいの大きさの子がヒットを打っていた。

???「ナイスバッティングだ佐藤！
良いセンスをしているな！」

吾郎（佐藤・・・？）

???「はい！

ありがとうございます！」

ヘルメットを脱いだ子の顔をみた吾郎は確信した。そして、ある過去のことを思い出していた。

3年前

ジョー・ギブソンから受けた頭部死球が原因で吾郎の父親は亡くなった。
吾郎はその父親の婚約者である星野桃子に引き取られた。
そのため、引っ越すことになったので、野球友達だった子にお別れを伝えにきた時、野球を辞めるかもしれないとその子に言った吾郎。
しかし、相手の子は別れ際に、

『待って！
じゃあ最後に、一球だけ、吾郎君の球捕らせてよ！』
その子は軟球を吾郎君に投げる。

『ダメだよ吾郎君！
野球辞めちゃ！

会えなくなっても、僕は吾郎君に教わった野球は辞めない！
だから吾郎君も、
おとさんにもう会えなくなっても、

おとさんに教わった野球を辞めちゃダメだよ！』

吾郎『トシくん・・・』

『さあ！』

トシくんと言われた子は、しゃがんでグローブを構えた。

そして、吾郎は彼が構えたグローブ目掛けて投げた。

２人は泣きながら、１つの約束をした。

『またいつか、

きっといっしょに野球やろーね！』

『うん！』

そして、現在。

???「今日の練習はここまで！」

横浜リトルの練習が終了した。

そして、佐藤と呼ばれた子の顔を吾郎はみて確信した。

吾郎（間違いない！

寿くんだ！）

初めて一緒に野球をやった友達、佐藤寿也であることを。

吾郎「おーい、寿くーん!!」

「!?」

寿也は、寿くんと呼ぶ彼をみて、まさかと思った。

吾郎「オレだよ、オレ！

本田茂治の息子、本田吾郎だよ!!」

樫本「何っ、本田茂治の息子だと!?」

寿也「ご、吾郎くん！」

そのあと2人はマナを加えてベンチで話をしていた。

寿也「ビックリしたなあ。

こんなふうに会えるなんて、思ってなかったから…」

吾郎「オレもだよ。
まさかあの寿くんが横浜リトルでやってるなんて、そりゃビックリだもん。」

そのあと、寿也は今は母親が野球の事を応援してくれることを、吾郎はドルフィンズを立て直して大会を目指すということと一緒にいるマナも凄い実力であることを話した。

寿也「ふぅん。

吾郎君も横浜リトルに入らないなんて勿体ないなあ。
十分通用するのに。」

???「おい、佐藤。
彼があの本田選手の息子なのは本当か？」

サングラスをかけた監督らしき人が来て、そのあと、吾郎とマナはテストをすることになった。

マナ「あ、あたしは別によかったんだけど・・・」
吾郎「いいじゃん、俺と相田のピッチングで横浜リトルをビビらせようぜ。」

先ずは吾郎、

吾郎（見学に来たのに、見学されてるじゃん。

まあいいか、久しぶりに寿くんと、

キャッチボールができるし）

ビュッ！　ズバーン！

「!?」

「は、はえー。」

「小4らしいけど、こんな速いピッチャーみたことねぇーぞ！」

???（速いわね。

変化球を覚えたら、あの江角達と張り合えるかもしれないわ）

横浜リトルのメンバーが驚くなか、青髪の少女は、冷静にみていた。

監督は、思わず目を見開いた。

寿也（は、速いよ！

やっぱり吾郎君はすごい!!）

次に、マナも投げることに。

ビュッ！　ズバーン！

「これも、さっきの奴ほどじゃないけど速いぞ！」

「本当に女子かよ！」

???（そういえば、一軍の練習中に女の子がテストをして合格したって樫本監督が言ってたわね。

ピッチング以外がダメで三軍にいるらしいけど。

でも、こんな良い球を女の子が投げたのは初めてみたわ）

寿也（吾郎君が言ってた通りだ！

彼女の球も凄い！）

吾郎「言っておくけど、相田は今日、始めてピッチング練習をしたばっかだからな。」

その吾郎の発言で、更にギャラリーはどよめく。

樫本「・・・・・・

よし！

良いだろう。

本田と相田だったな。

合格だ。

来週から横浜リトルのユニフォームを来て練習に参加しろ。

プロへの階段を登らせてやる。」

相田「・・・・え？」

吾郎「何が？」

寿也「凄いよ2人とも！

たった1球で入団テストに合格したんだから！

ドルフィンズなんかやめてうちに入りなよ！

一緒に野球をやろうよ！」

吾郎「わりーけどオレ、そんな気更々ないんだよね。」

寿也「え!?」

マナ「あたしもあんまり・・・」

吾郎は、仲間を裏切れないことと、母親に野球エリートに反対していることを理由に拒否。マナは、いきなりそういうことを言われてもという事で状況を飲み込めていなかった。

樫本「お前はどうなんだ?」

吾郎「?」

樫本監督は、そんな事情より、自分自身はプロになりたいのかと吾郎に尋ねる。

プロになりたいのなら、環境のいいところで野球をすればプロに入る確率は上がると言った。

樫本「相田、お前はどうなんだ?」

マナ「えーと、あたし、まだ野球を始めたばかりで、まだ何もわからないあたしが入って、どうにかなるんでしょうか?

それに、プロとか言われても、まだそんな事はわからないんで。」

樫本「そんな事は心配するな。お前は潜在能力がある。練習を通じて野球を学べば問題はない。

近年では、女性のプロ野球選手は急増している。

その1人に入る資質は、間違いなくあると思うがな。

今日、セカンドを守っていた彼女と同じように。」

マナ「そうですか・・・」

樫本「すぐに入れとは言わない。しっかりと考えてくれればいい。」

マナ「はい・・・」

吾郎「いーよオレは。
だいたい偉そうな大人に指図されながら野球をやったってちっとも面白くないよ。」
寿也「吾郎君・・・」

吾郎「オレのコーチはおとさんだけだよ。」

樫本「そうか、そこまで言うなら強制はしない。
しかし、それほど父親を尊敬するのなら、

尚更父親のいた横浜リトルに入ろうと思うはずなのだがな。」

吾郎「おとさんが、ここに・・・？」

寿也「吾郎君知らないの!?

吾郎君のおとうさんはここのＯＢなんだよ！
それに、他に何人もここからプロの選手になってんだよ！
監督だってここのＯＢで、昔はプロの選手だったんだから！」

吾郎「!?」
マナ「そうなんですか・・・」

樫本「俺はお前の親父ほどたいした選手では無かったがな、
本田（やっ）とは子供の頃、ここで一緒にプロの夢を見た仲間だったな。」

吾郎「・・・・・」

樫本は吾郎の父親のことをサングラスを外しながら語っていた。

そして吾郎は、心が揺れ始める。

みんなで一緒に頑張るよ！

吾郎「・・・」

吾郎は帰り道、あることが頭に引っ掛かっていた。

おとさんが、横浜リトルにいたということに。

寿也「樫本監督はとってもいい人だよ。

そりゃ練習中は厳しいけど、終わったら皆にアイスを買ってくれたり、いろいろな悩みを聞いてくれたりするんだ。」

マナ「そうなんだ。」

吾郎「・・・」

寿也「相田さんも、うちで野球をやったら、もっとうまくなれると思うよ。

だから、２人が横浜リトルに入ってくれたら嬉しいな。吾郎君のお父さんや監督みたいに、僕たちもプロ目指して一緒にやろうよ！」

吾郎「・・・・・」

吾郎は寿也やマナに声をかけられる時以外は終始黙ったままだった。

マナ（考えたことなかった・・・

将来、野球を仕事にするとか

あたし、まだそんなことわからないけど、

何をしたいんだろう・・・）

マナも帰り道、自問自答していた。何のためにを野球をするのか。

しかし、結論はそんなに時間はかからなかった。

マナが帰宅したとき、

マナ「ただいま。」

マナママ「お帰りマナ。

そうそう、六花ちゃんから渡したいものがあるんだって。」

そう母親から渡されたのは、野球規則の本だった。

マナ（直ぐに六花にお礼を言わないと！）

そう思ったマナは、向かいにある六花の家にお礼を言いに行った。

マナ「六花！」

六花「マナ、どうしたの？」

マナ「あたし、ドルフィンズで六花や皆と一緒にがんばるから!!!」

六花「え？

そ、そうね。」

マナは、ドルフィンズの仲間と共に野球をすることを決断した。

翌日の休み時間の屋上にて

吾郎は、マナと小森を呼んだ。

吾郎「俺、やっぱり横浜リトルに行くことにしたよ。」

マナ「そうなんだ・・・」

小森「本田君・・・」

マナ「でも、あたし、本田君のこと、応援しているから！」

本田「う、うん・・・」

マナ（本田君、まだ迷っているのかな・・・

本当に行きたいなら、苦しそうな顔なんてしないよ・・・）

マナは、吾郎が桃子と対立していることを知らなかった。

その放課後、

マナ「あれ、本田君は？」

小森「実は・・・」

マナは吾郎の母親が倒れて病院に運ばれた事を小森から聞いた。

マナ（大丈夫かな・・・）

マナはその事で頭がいっぱいのまま家路に着いた。

その夜、

吾郎から電話が来た。

吾郎「相田！
悪いけど明日の休み時間、菱川連れて屋上に来てくれ！

打倒横浜リトルの為にな!!」
マナ「え!?
横浜リトルにはいかないの!?」

吾郎「ああ、その事は忘れろ。

俺達のドルフィンズの目標は、打倒横浜リトル！

そして、全国だ!!」

マナ「!?

一緒に頑張ろうね本田君!!」

吾郎「ああ。これからも宜しくな相田！」

こうして、吾郎とマナは改めて、ドルフィンズを強くすることを決意した。

合宿だよ！

吾郎で電話があった翌日

学校の屋上では、吾郎、マナ、小森、六花、清水、沢村が野球の練習をしていた。

清水「あ、あれ？」

紙ボールを使ったノックをしていたが、清水はことごとく紙ボールを弾いていた。

清水がだったらやってみろと云わんばかりに吾郎に紙ボールを投げ返したら、吾郎は難なく紙ボールをキャッチした。

吾郎曰く、イレギュラーしやすい紙ボールを素手で捕ることで、グローブでボールをキャッチ出来る様にするトレーニングらしい。

吾郎「じゃ、次は相田な。」

吾郎が紙ボールを投げる。

マナ「よしっ！

!?

取れた!!」

吾郎「おお!!」

沢村「すげえ!!」
小森「すごい！」

マナは見事にボールをキャッチした。

沢村「お前天才かよ!!?」

小森「初心者でキャッチするなんてスゴいよ!!」
清水「あんた本当に何者だよ!!?」

吾郎「やるじゃん相田!!」

吾郎達も1発でキャッチしたマナに驚いていた。

話はそこから、吾郎がギブソンからメジャーのオールスターゲームの招待状を受け取った話に。
そこで、かあさんが病み上がりということで代わりに誰か一緒に来てほしいというものだった。
海外旅行という事で舞い上がる沢村と清水だったが、吾郎は小森を誘った。しかし、
小森「いや、それは皆に悪いよ。」
次に、吾郎はマナを誘うが、
マナ「あたしもなんか悪いかな～。」
吾郎「じゃあ、菱川は？」
六花「私は習い事があるから。」
吾郎「ちぇ、つまんないな～。
仕方ない、２人でじゃんけんな。」

じゃんけんの結果、清水が一緒にアメリカに行くことになった。

そして、オールスターゲーム当日

ぶたのしっぽ亭

マナ「いよいよ始まるね！」
マナにテレビ観戦だ。六花は習い事でいない。

試合は、ギブソンの6者連続三振が大きな話題となった。チームの勝利しＭＶＰに輝いていた。

マナ「凄い・・・！」
マナは興奮した。ギブソンと相手打者の真剣勝負に。メジャーリーグの代表するバッターから逃げず、自信のあるストレートだけで三振を取ったギブソンの勇姿に。

マナ「凄かったな・・・
よし！　あたしも頑張ろう！」
マナはその後、シャドーピッチングをした。

それから吾郎が帰国してからの練習日

吾郎と清水からお土産を貰ったマナ達
小森はＴシャツ、マナはリストバンド、六花は帽子、沢村はお菓子（何故か日本語で書かれている）を貰った。

練習後、

「合宿!?!」
吾郎「折角の夏休みだし、もっと集中的にやれば皆うまくなると思

うんだ。」

監督曰く、強豪チームだった頃は横浜リトルを始めとする多くの強豪チームが来ていた場所で合宿をしていたという。

吾郎「それ、いいじゃん！そこでやろうよ！」

難色を示すメンバーが多い中、

吾郎「一気にレベルアップするチャンスだよ！
どうせ、失うものはないんだしさ！」

マナ「そうだよね！
あたし達が何処までやれるのかを見れるいい機会だし。」

小森「確かに、本田君の言うとおりだよ。いい機会だと思うよ。」

こうして、ドルフィンズの夏合宿開催が決定した。

夏合宿開始当日

マイクロバスに揺られながら、吾郎達は合宿場所へと向かっていた。横浜リトル以外にも強豪チームが集まるという合宿施設。強豪チーム同士で練習試合等もやるのだという。

途中、メンバーでババ抜きをしていたが、吾郎は窓からの風景を眺め、六花は本を読んでいた。

こうして、無事合宿場所に到着ドルフィンズ御一行。しかし、初日からちょっとしたトラブルが。

沢村「誰か寝てるぞ？」
吾郎「おじさん、本当にここで合ってるの？」
安藤「おかしいな。確かにここだと言われたのだが。」

ドルフィンズの部屋に、太った男が寝ていたのだ。

吾郎「おいおっさん！　ここは三船ドルフィンズのへやだぜ。」
吾郎は太った男を踏む。

六花「ちょっと本田君！　失礼でしょ！」
吾郎「いいじゃん、部屋間違えているおっさんが悪いんだし。」

すると、

太った男「おっさんってぼくのことかなあ？」
「え？」

太った男が起き上がった。
太った男「ひどいな君、ちょっと太めの野球少年に向かっておっさんはないでしょ？」
吾郎「えっ、野球少年・・・？」
野球少年と知った吾郎は驚く。
更に、寝てる人に向かって踏んづけたお仕置きとして、ちょっと太めの野球少年は吾郎に尻叩きをし、部屋から出ていった。

清水「（。д。）ポカーン」
六花「な、なんだったのかしら・・・？」
マナ「さあ・・・」

すると部屋の外から、

「こらあ！　上河内!!」

野球少年がちょっと太めの野球少年の元へ詰め寄ってきた。

簡潔にいうと、

ちょっと太めの野球少年こと上河内は練習をサボっていて、その上河内がいるチームが練習試合をしていて、チームが敗色濃厚なので来てほしいとのことだった。

吾郎「試合？」

吾郎、安藤、小森、そしてマナは上河内と上河内を探していた子の後を追ったのだが、それが翌日、吾郎に最大の試練が訪れることを誰も知らなかった。

能力紹介　パート２　この小説の時間軸（アンケート有り）

はじめに

投手の肩力に関しては、球速によって決まります。

球速　１２０ｋｍ以上　　肩力　Ｓ
　　１１５ｋｍ～１１０ｋｍ　肩力　Ａ
　　１０９ｋｍ～１００ｋｍ　肩力　Ｂ
　　９９ｋｍ～　９５ｋｍ　肩力　Ｃ
　　それ以下　　肩力　Ｄ

とします。

また、パワプロには登板適性というのがありますが、少なくとも高校編までは設定しません。

あと、この小説はパワプロ世界の中ということになっていますので、今どの時間軸なのかも説明します。吾郎がアメリカに行っているときのプロ野球編でパワプロキャラを出す予定なので。

相田マナ
右投げ右打ち
ポジション　外野手
サブポジション　投手
フォーム　オーバースロー
投手能力
球速　１００ｋｍ
コントロール　Ｅ
スタミナ　Ｂ
変化球　なし
特殊能力　対ピンチＢ　闘志

野手能力
ミート　Ｄ
パワー　Ｃ
走力　Ｂ
肩力　Ｂ
守備力　Ｃ
捕球　Ｄ
特殊能力　逆境〇　意外性　積極守備
坂上あゆみ
右投げ右打ち
ポジション　投手
フォーム　オーバースロー
投手能力
球速　９０ｋｍ
コントロール　Ｂ
スタミナ　Ｅ
変化球　チェンジアップ　１
特殊能力　打たれ強さＦ

野手能力
ミート　Ｇ
パワー　Ｇ
走力　Ｆ
肩力　Ｄ
守備力　Ｆ
捕球　Ｆ
特殊能力　チームプレイ〇

水無月かれん
右投げ左打ち
ポジション　二塁手

サブポジション　遊撃手
野手能力
ミート　Ａ
パワー　Ｂ
走力　Ａ
肩力　Ｂ
守備力　Ｂ
捕球　Ｂ
特殊能力　盗塁Ｂ　アベレージヒッター　流し打ち　守備職人

佐藤寿也
右投げ右打ち
ポジション　捕手
野手能力
ミート　Ｃ
パワー　Ｃ
走力　Ｃ
肩力　Ｂ
守備力　Ｂ
捕球　Ｂ
特殊能力　キャッチャーＡ　送球Ｂ

川瀬涼子
右投げ右打ち
ポジション　投手
フォーム　オーバースロー
投手能力
球速　９５ｋｍ
コントロール　Ｂ
スタミナ　Ｃ
変化球　ムービングファスト

特殊能力　キレ○　対強打者○

野手能力
ミート　D
パワー　D
走力　C
肩力　C
守備力　B
捕球　B

真島
右投げ右打ち
ポジション　三塁手
野手能力
ミート　A
パワー　S
走力　C
肩力　C
守備力　C
捕球　C
特殊能力　パワーヒッター　威圧感

江角
右投げ右打ち
ポジション　投手
フォーム　オーバースロー
投手能力
球速　１１０ｋｍ
コントロール　B
スタミナ　A
変化球　カーブ　６

特殊能力　キレ○

野手能力
ミート　C
パワー　B
走力　D
肩力　A
守備力　C
捕球　C

上河内
右投げ右打ち
ポジション　捕手
野手能力
ミート　B
パワー　S
走力　G
肩力　B
守備力　C
捕球　C
特殊能力　チャンスB　キャッチャーC　パワーヒッター

パワプロ世界の時間軸
分かりやすいように吾郎の年齢も入れておきます（満年齢）。

吾郎　0歳　猪狩守、早川あおい高校へ進学
吾郎　1歳　早川あおい、公式戦出場で賛否両論に
吾郎　2歳　女子選手高校野球公式戦出場が正式に認められる。
尚、早川あおいのいる恋々高校は地区大会準決勝でパワフル高校に敗れる。パワフル高校は代表校となり、夏の甲子園を制覇。その秋のド

ラフト会議で猪狩守はウォリアーズに、早川あおいはパイレーツにドラフト指名される。

吾郎　４歳　友沢亮、橘みずきが高校へ進学

吾郎　６歳　シーズン前に、猪狩守はカイザースに、早川あおいはキャットハンズに移籍する。そのシーズンオフのドラフト会議で、友沢亮はカイザースに、橘みずきはキャットハンズにドラフト指名される。また、シーズンオフにウォリアーズはジョー・ギブソンを獲得する。

吾郎　７歳　本田茂治がジョー・ギブソンから死球を受け、翌日死去。

吾郎　８歳　存続の危機に立たされていたパワフルズがカイザースとのリーグ最終戦に勝利しリーグ優勝。日本シリーズはやんきーずが優勝、その試合後に胴上げ投手になった阿畑やすしが交際中だった芹沢茜にプロポーズしたことがちょっとした話題となる。

吾郎　１０歳（現在）　友沢亮、橘みずきと同年齢の大学生は４年生。

ということになっています。

練習試合だよ！

ちょっと太めの野球少年こと上河内の後を追ってグラウンドへやって来た吾郎もマナ達。

そこでは、強豪チーム同士の練習試合が行われていた。

マナ「浦安と久喜？」
小森「浦安と久喜って、今年の夏の全国に出場しているよ！」
吾郎「なんだって!?」

上河内は、その久喜リトルの選手のようだ。

試合は1―0で浦安リトルがリードで最終回、久喜の攻撃でツーアウトランナー一塁。

そこに、上河内がピンチヒッターで登場。

結果は文句なしのホームラン。部屋で待っていて、ベランダにいた沢村に直撃する大アーチだった。

そこに、
吾郎が勝負を吹っ掛けてきたのだ。

上河内との1打席勝負に勝ったら明日練習試合をするという条件であったが、吾郎は上河内相手に三球三振に打ち取った。

その夜、

沢村「なにいいいいい!!!
昼間会ったデブがいるチームと練習試合だあ!!?」

グラウンドにいなかったメンバーが明日試合することを知り不安になるが、

吾郎「心配要らねーよ。左腕の影響もないし、それにあそこの４番のデブを三振に取ってきたから。」

マナ「スゴかったんだよ！

本田君の球に１球もかすらなかったんだから！」

小森「行けるよきっと!!

僕達が頑張れば、全国大会も夢じゃないんじゃないかな・・・？」

一方、吾郎から三振を食らった上河内は、旅館の外で暗い中黙々と素振りをしていた。

こうして翌日、三船ｖｓ久喜の試合の日を迎えた。

ドルフィンズのスタメンはご覧の通り

１番　ＣＦ　相田
２番　ＳＳ　前原
３番　ＣＣ　小森
４番　Ｐ　本田
５番　３Ｂ　夏目
６番　１Ｂ　田辺
７番　２Ｂ　長谷川
８番　ＬＦ　鶴田
９番　ＲＦ　沢村

１回表　久喜リトルの攻撃

久喜リトルの監督は、吾郎はノーコン速球派と踏んで待球作戦を指示するが、呆気なく三者三振に終わる。

1番バッター「監督、コントロールもいいですよ。」

久喜監督「・・・・！

しゅ、守備だ!!　兎に角０点に抑えれば負けはない!!」

1回裏

先頭バッターはマナ。久喜リトルのキャッチャーはあの上河内だ。

久喜リトル先発ピッチャーの初球。

ビュッ　ズバーン！

球審「ストライーク！」

マナ（あれっ！　本田君の球を見ているからかな？　あまり速いと感じないな）

続く2球目、

カキーン！

三遊間を破るヒットを放つ。

続く前原は送りバントをし、マナは2塁へ進塁。

続く小森をバッテリーは敬遠を選択。

実は吾郎、アメリカ旅行の際に左腕を怪我していた。なので、左手でバットを持てない状態だった。現に、投球の際も、左腕は三角巾にぶら下げている。

そこを久喜バッテリーは見ていたのだ。
そして、吾郎の打席。
なんと左バッターボックスに立っていた。
監督は、1塁ベースが近い左打席に立って、セーフティバントを狙うのではないかと考えていた。
しかし、流石は全国へ行くチーム。久喜ベンチもそれを読んでファーストとサードがチャージをかけた。
しかし、
吾郎「俺、バントはだいっ嫌いなんだよなあ。」
カキーン！
何と右手一本で打った吾郎。打球はぐんぐん伸びていき、
ライト方向のフェンスを越えていった。
続く5番6番は凡退に終わり、次は2回表。
吾郎と上河内の2度目の対決が始まる！

あたしがピッチャー!?　前編

２回表、先頭バッターは上河内。

昨日とは打って変わって気合い十分の上河内。昨日の三振が彼の闘志に火をつけたのだろう。そして、彼は吾郎の弱点を見抜いていた。

上河内（確かに、君の投げる球は速いよ。
でも、
ストレートだけで、僕を抑えられないんだな）

その初球、

カーーン!!

打球はバックネット方向へ、

久喜監督「当たった！」

吾郎は余裕の表情に対し、小森は次のコース、アウトローを選択、厳しいコースを突かないと抑えられないと踏んだ。

しかし、

カキーーーン!!

ライト方向へ鋭い打球が飛ぶ。

ガシャン！

審判「ファール！」

紺田「だーーー！
おしい!!」

ホッとする三船バッテリー。

上河内、流石は全国大会に出場する４番打者である。

吾郎「へぇ、やるじゃん、
ちょっと太めの野球少年。」

すると、バッターボックスへ戻る上河内は吾郎に助言（？）する。

上河内「君、変化球を覚えた方がいいよ。
どんな偉大なピッチャーでも、ストレートだけじゃ必ず打たれるからね。」

それに対して、

吾郎「なんだよおまえ…
この前アメリカのオールスターゲーム、観なかったのか？」

すると、吾郎は左腕をぶら下げていた三角巾をマウンドに捨てた。

そして、普段と同じ様にワインドアップで振りかぶった。

吾郎「本当に偉大なピッチャーっていうのはな…

わかってても、

打てないウイニングショットを持ってんだよ!!」

ズパーーーーン!!!

審判「ストライク!
バッターアウト!!」

またしても、吾郎は上河内を三振で打ち取った。

そこに、

「おい、上河内から三振を奪ったぞ。」
「あのユニフォーム、どこのリトルだ?」

監督「よ、横浜リトル!?」

何と横浜リトルの主力がランニング中に通りかかったのだ。

「僕知ってますよ。あれ、同じ神奈川の三船リトルですよ。」

あの上河内を打ち取ったピッチャーの名前を知る横浜リトルの選手は、彼しかいない。

寿也「彼の名前は本田吾郎、
以前、うちの二軍の練習に来たとき、樫本監督がうちにスカウトしたほどの速球投手ですよ。」

だが、以前、彼を見た横浜リトルの主力は寿也だけではなかった。

???「確か、あのセンターの子も監督にスカウトされていなかったかしら？」

青髪の少女は、マナを指差しながら言った。

寿也「そうでしたね。水無月先輩。」
???「成る程、かれんがリハビリで二軍にいたときの事か。」
かれん「ええ。」

その後、5番6番と連続三振に打ち取った吾郎は、横浜リトルがいるフェンス付近へ。

吾郎「どうですかお客さん？
明日にでも僕の球打ってみたくないですか？」

吾郎は、練習試合をしようと持ちかけたが、ランニング中の為、横浜リトルのメンバーは引き上げた。一応、寿也は監督に話してみると言っていたが・・・

そうこうしている間に、三船リトルの攻撃は3人で終了していた。

三回表の攻撃前、久喜リトルは円陣を組んでいた。

その回、久喜リトルの先頭バッターはバントを試みた。

しかし、キャッチャーフライ。

久喜リトルは、吾郎をバント攻めで崩す作戦に切り替えたのだ。

続くバッターも初球を当てることは出来なかったのだが、吾郎は2球目を敢えて緩い球を投げた。

コーン

吾郎「おっしゃ！

グラブなんていりましぇーーーん!!」

利き手でしっかりキャッチにピッチャーゴロで仕留めた。

フィールディングも、吾郎は完璧である。

続くバッターも、

コーン

吾郎「見よ、この華麗なフィールディング!!」

しかし、

コツン！

吾郎の送球は、バッターランナーのヘルメットに直撃、今日最初のランナーを許す形になった。

吾郎「お、おい！　だ、大丈夫か!?」

ランナー「あ、大丈夫大丈夫。」

吾郎「そ、そうか・・・！」

このプレーが、吾郎の歯車を狂わせ、そして大きなトラウマを呼び起こしてしまう。

ズパーーン

審判「ボール！」

吾郎が投げる球は、全くストライクゾーンへ入らなくなってしまったのだ。

特に、インコースにコースを要求していた時は顕著だった。

連続フォアボールで満塁となり、3番バッターにタイムリーを打たれツーアウト満塁で上河内に打順が回る。

吾郎（あれ・・・

おれ、どうしちまったんだよ・・・）

吾郎は、あのトラウマに完全に取り憑かれていた。

中編へ続く

あたしがピッチャー!?　中編

デッドボールを恐れるあまり、ピッチングがいきなり乱れた吾郎。

三船リトルが3―1でリードし、三回表久喜リトルの攻撃、塁が埋まったところで、４番上河内。

小森（やっぱり、あのエラーで、

本田君は・・・）

吾郎の異変を小森は気づいていた。

しかし、バッターにボールを当てる恐怖に囚われている吾郎の球など、上河内の相手ではなかった。

カキーーーン!!!

推定１２０ｍの大アーチがフェンスを越えていった。

三船リトル３―５久喜リトル

小森「タイム!!

監督!!」

小森がタイムをかけて、安藤監督を呼びマウンドへ。

監督「一体どうしたんだ吾郎くん？」

吾郎「な、なんでもないって、

まだ2点差！　こっから抑えて逆転すれば」

小森「何でもなくないよ！」

監督「小森くん・・・？」

小森「監督、やっぱり本田くんは、さっきのあのエラーで、デッドボールを恐れているんです。」

吾郎「・・・！」

監督「やはり、あのお父さんのデッドボールの事を・・・」

吾郎「だ、大丈夫だって！

俺はまだ、」

小森「大丈夫じゃないよ！」

吾郎「!?」

小森「大丈夫だったら、こんな怖い顔しないよ・・・」

吾郎の表情は大丈夫とは程遠いものだった。何かに恐れているような、そんな顔だった。

監督「このまま投げさせては、吾郎君は完全に投げられなくなってしまう。

ここは、棄権というのも、」

吾郎「ダメだよおじさん！」

監督「ご、吾郎くん・・・」

吾郎「まだ、試合の途中だ！

そのまま逃げるなんてできねえよ・・・」

監督「しかし、これ以上は、」

吾郎「ああ、俺はもう投げないよ。

でも、アイツに任せれば、勝つチャンスはまだ・・・」

小森「・・・!?

そうか！

相田さん！　ちょっと来て!!」

小森は外野にいるマナを呼んだ。

沢村「おっ、ご指名だぞ相田。」

マナ「う、うん。」

マナがマウンドの方へ向かうと、

マナ「え!?
アタシがピッチャー!?」

監督「ああ、今の吾郎くんの状態では君以外に投げられるピッチャーがいないんだ。」

マナ「で、でも、あたし、試合で投げたことなんて」

吾郎「頼む・・・
俺、どうも限界みたいなんだ・・・
悔しいけど、もう・・・」

マナ「本田くん・・・」

吾郎「あと3イニング、頼んだぜ・・・」

吾郎はマナにボールを渡すと、ベンチへと引き上げた。

マナ（こんなに苦しそうな本田くん、見たことあったっけ・・・
でも、このまま何もできないよりは、やるしかない！）

マナは改めて気合いをいれた。

ピッチャー　吾郎→マナ
センター　マナ→沢村
ライト　沢村→清水

久喜選手「な、なんだ?」

久喜選手「ピッチャー交代か？」

久喜選手「おい、女の子がマウンドに上がってるぞ。」

久喜選手「とうとう相手も自棄になったか？」

しかし、

シュッ！　ズバーン!!

久喜選手「結構球は速いぞ。」

久喜選手「なーに、今ウチのチームが勝ってるんだ。それに、あんな球、上河内の相手じゃないって。」

試合再開　三船リトル３―５久喜リトル

三回表　ツーアウト　ランナーなし

審判「プレイ！」

マナ（・・・え？

マウンドってこんなにすごいの・・・？）

一度マウンドに上がって投げたことがあるとはいえ、ピッチャーとしての経験が全くないマナ。しかも、相手は全国大会に出場するほどの強豪チーム。完全に空気に飲まれていた。

だが、

小森「相田さん！」

マナ「!?」

小森「肩の力を抜いてリラックスしよう！
あとは、僕のミットにおもいっきり投げてね！」
マウンドに上がり、緊張していたマナを落ち着かせようと小森はマナに伝えた一言、それは功を奏した。
マナ「うんっ！」
マナは深呼吸として、ピッチャーズプレートに足をかけた。
マナ（本田くんは苦しんでいる・・・
その為にも、
チームやあたし達を助けてくれた本田くんを
あたし達が助けなきゃ!!）
ビュッ　ズバーーーン!!!
マナが投じた初球は、アウトロー一杯の１００ｋｍ近くのストレート、バッターは空振りをしていた。
後編へ続く

あたしがピッチャー!?　後編

急遽、吾郎に代わってマナがマウンドへ。

その初球、

ビュッ　ズバーーーン!!!

審判「ストライーク!!」

外角低めの１００ｋｍのストレートがキャッチャーミットに吸い込まれていった。

続く２球目、

ビュッ　ズバーン!!

今度は内角低めのストレート。バッターはスイングするも空振り。

小森（すごい。

相田さんの球、とても力強い！）

そして３球目、

ビュッ　ズバーン!!

審判「ストライーク！　バッターアウト!!」

今度は高めの釣り球にバッターが反応。見事に三振に打ち取った。

小森「ナイスピッチング！」
沢村「凄いぜ相田！」

チームメイトから祝福されながらベンチへと戻るマナ。

そこに、

吾郎「ナイスピッチング」

吾郎がベンチから出迎えてくれた。

マナ「ありがとう。」
吾郎「ごめんみんな！」
マナ「え？」

吾郎「俺のせいで、こんなことになっちまって。
俺が浮かれてたばっかりに・・・」

マナ「どうして謝るの？」
吾郎「え・・・？」
マナ「だって、本田くんのお陰でさっきまで勝っていたんだもん。
だから、今度はあたし達が本田くんを助ける番だから！」

吾郎「相田・・・」
小森「まだ2点差だよ！
本田くんの分まで僕達が頑張れば、勝てるかもしれない！」
沢村「ああ、いつまでも本田だけに頼ってたら、俺達も上手くならないしな。」

マナ「皆、絶対勝つよ!!」

「オーーーーー!!!!!」

こうして、再び三船ナインの闘志は火が点いた。

結論から言うと、ドルフィンズは勝利を挙げることは出来なかった。

しかし、最終回に同点に追い付き、引き分けに持ち込んだのだ。

特に、マナのピッチングは圧巻だった。

４回を無失点に抑え、５回はランナーを置いた状況で上河内。

小森（ランナーを置いた状況で上河内くん、

最悪、敬遠で次のバッターとの勝負も

!?）

小森は、マウンド上のマナの表情を見て、思い直した。

小森（いや、ここは、
相田さんを信じよう！）

相田の決して怯むことのない目を見て、勝負に出た。

その初球、

ビュッ　ズバーン!!

球審「ストライーク!!」

外角一杯の１００ｋｍ台のストレート、

続く2球目、

ビュッ　カーン　ガシャン!!

墨審「ファール！」

三塁線へ鋭い打球が飛ぶもファール。

上河内（へぇ、なかなかやるね。

でも、君のストレートしか来ないのがわかっている以上、

僕の敵ではないね！）

カーーーン!!

パシッ！

墨審「アウト！」

インコース一杯のストレートは、今日1番のボール。差し込まれてサードフライに打ち取った。

安藤監督「今のは、
気持ちで打ち取ったね。」

吾郎「気持ち・・・」
安藤監督「今の相田さんは、絶対に抑える気持ちで相手バッターに怯むことなく投げた。
その気持ちが乗ったボールで、彼を打ち取ったんだ。」
吾郎「そうだよなおじさん、やっぱり、気持ちで負けてたら、勝てる相手にも勝てないし、強い相手にも勝てっこないもんな。」

安藤監督（でも、
彼らはまだ諦めていないのは、吾郎くんの為にという気持ちで戦っているからだ。

チームというのは、皆が1つの方向へ向いているからこそ強くなるもの。

私も如何に、チームの1つにするためにはどうすればいいか、しっかりと考えないといけないな）

その裏、ドルフィンズは久喜リトルの先発の疲れ時を攻め立てて、

同点に追い付くことに成功したが、替わったピッチャーの前に逆転することは出来なかった。

収穫、課題、どちらも大きな成果があったドルフィンズ。

だが、それ以上に大きな問題をドルフィンズは抱えてしまったのだ。

マナ「デッドボール恐怖症？」

安藤監督が説明するには、今日の試合での送球ミスで、吾郎にデッドボールに対する恐怖心でピッチングが出来なくなってしまったという。

吾郎は、かつてデッドボールで父親を失った。その時のトラウマがここで再発してしまったのだろう。

マナ「一体、どうすれば・・・」

安藤監督「取り敢えず、今はそっとしてあげよう・・・」

試合が終わって、既に日没が迫った中、吾郎はベンチでただ1人佇んでいた。

続く

恐怖なんて吹き飛ばせ！

日が暮れてきた真夏のグラウンドのベンチで唯1人、

吾郎は苦悩していた。

もうおとさんを振り返りながら野球をやらないと決めていたのに、ギブソンとの恨みなどはなくなったはずなのに・・・

あの出来事が、今の苦しめていることに。

吾郎は、ベンチから立ち上がり、グラウンドを去ろうとしたところ、

「本田くん!!」

吾郎「こ、小森・・・？」

小森は、プロテクターに打者用のヘルメットを身に付けて、バットを持っているという奇妙な格好になっていた。

小森「本田くん、まだ投げれる？」

小森は、そのままバッターボックスへ

小森「投げれるなら、

ぶつけたっていいから、思いっきり投げて!!」

吾郎「小森・・・」

小森「レガースにプロテクターも着けてるから当たったって大丈夫だから、

勇気を出して、力一杯投げてよ!!」

そこに、

「待てよ。」

「汚ねーぞ小森、
お前だけいい格好しやがって。」
「小森には本田の球を取るって仕事があるだろ?」

いても立ってもいられなかった沢村と清水がそれぞれ左右のバッターボックスへ。

清水「これで、嫌でも真ん中に投げるしかねーだろ。」

さらに、

「打たれたとしても大丈夫!
あたし達がその球を取るから。」

「本田くんは、1人じゃない。
皆がいるから!」

マナと六花が、グローブ片手に内野の守備位置についた。

吾郎「み、みんな・・・

よーーーし!!

お前ら死んでもしらねーからな!!!」

吾郎はマウンドへ立ち、小森はキャッチャーミットを構え、バッターボックスへいた沢村と清水が構え、一二塁間の六花と二三塁間のマナが構えをとった。

しかし、

吾郎の力の入った球は、

小森のミットに吸い込まれることはなかった。

大切な仲間だからこそ、尚更吾郎は投げることは出来なかったのだ。

そして、吾郎はある1つの結論に達する。

だが、それは無謀で且つ、投手生命を終わらせかねない大博打であった。

その夜、

安藤監督「な、なにーーーー!!!?

明日横浜リトルと練習試合ーーーーー!!!!?」

安藤からすれば、寝耳に水の話だ。

無理もない、横浜リトルが練習終了した時に、吾郎が監督の樫本に直談判。最初は突っぱねる様な態度を示していたが、マナや小森達が頭を下げながら懇願し、ＯＫが出たのある（尤も、樫本曰く、絶対に断ろうとしていたのではなく、吾郎の頼む際の態度が礼儀に欠いていたからその様な態度を取っていたのだ）。

安藤は、あまりにも無謀すぎると考え直すように説得したのだが、

吾郎「いいんだよおじさん、

おとさんがいた日本一のチームを前にに俺の体が怖じ気づくのなら、

その時はおとさんと心中するまでさ。」

翌朝

グラウンド

横浜リトルの練習を見て、圧倒される三船ナイン。

だが、

沢村「まあ、俺達は気楽にやればいいんだよ。」

マナ「そうだね、今日は本田くんが立ち直れるかどうかの試合だから。」

エースの復活を懸けた無謀な練習試合。

しかし、この試合は思わぬ方向へと進んでいくことになる。

続く

チェンジアップ・・・？

いよいよ迎えた練習試合。

安藤監督から事情を聞いた樫本は、昨日の吾郎の切羽詰まった様子に納得がいったが、安藤監督からは、吾郎にとってこの試合は逆効果ではないのかと言われ、もし効果がないのなら試合と止めるように頼まれた。

樫本「プレイボール!!」

樫本が審判することに。

ドルフィンズのスタメン
1番　2B　長谷川
2番　SS　前原
3番　CC　小森
4番　P　本田
5番　3B　夏目
6番　CF　相田
7番　1B　田辺
8番　LF　沢村
9番　RF　清水
ベンチ　菱川　鶴田

吾郎にとって、この試合は決して引くことのできない試合。ここで終わってはいけない。必ず投球への恐怖心に打ち克たなくてはいけない。その思いで一杯だった。

吾郎（逃げないぞ！

逃げるもんか!!

こんなところでダメになったら……

1番悲しむのは、天国のおとさんなんだ!!!

横浜リトルを打ち取って、

俺は、俺を取り戻すんだ!!!）

運命の第1球!!

ズバーーーン!!!

樫本「ストライーク!!」

自慢のストレートが、外角一杯に決まった。

吾郎「・・・

ははははは!!

どうだ見たかコノヤロー!!

あんまし、速くて手が出せなかったか!!?」

何を言ってるんだという表情でみる横浜リトルの1番バッターだが、吾郎からすれば、昨日の惨状からストライクゾーンにしっかりと投げられるだけでも大事件だったのだ。

2球目、3球目の素晴らしいストレートで三振に打ち取った吾郎。

清水「ナイス本田！」

マナ「すごい・・・　たった1日で克服するなんて！」

三船ナイン、安藤監督は吾郎の完全復活を確信した。

寿也（それにしても、昨日は調子が悪い様なこと言っていたけど、一体何だったんだろう？）

ベンチで吾郎の投球をみる寿也も、昨日のあの表情を感じさせない球を投げるのを見て不思議に思った。

しかし、小森には不審な点を感じていた。

小森（3球続けてアウトロー・・・

確かに簡単に打てるコースじゃないけど・・・）

その疑心は、次のバッターとの対戦で確信に変わる。

初球、2球目共にアウトコースの球を投げた吾郎。そこで小森は、インコースに要求。

吾郎の投げた1球は、

緩いチェンジアップだった。

バッターはタイミングを図れず空振り三振。

マナ「すごいよ！　こんな球を本田くんは投げられるなんて!!」

横浜リトルも、あんなチェンジアップを持っていたとは思わず、感心するほどだ。

そんな中、1番戸惑っていたのは・・・

小森（違う！
本田くんはチェンジアップなんて1度も投げたことがない。
アウトコースに速い球が投げられるのにインコースを要求したらチェンジアップになったってことは、
やっぱりまだ本田くんのデッドボール恐怖症は治っていないんだ!!）

結局、小森はその事には触れずに今日の試合はリードしていこうと考えた。

しかし、その事を小森以外で気づいていた人がいた。

続く3番バッターにも初球はアウトコース。

続く2球目、

ビュッ　ズバーーン!!

アウトコースの一杯のストレート。

ところが、

樫本「ボール！」

吾郎「何っ！」

吾郎は入っていると思っていただけに驚きが隠せない。直ぐ様抗議するも、樫本は相手にせず。

ギリギリのコースだっただけに、ボールと判定するのは不思議ではない。

続く3球目、

ビュッ　ズバーーーン!!!

ストライクを取りに行ったアウトコースのストレート。

しかし、

樫本「ボール！」

吾郎「な、何だと!?」

コース、高さ、完璧にストライクを取りに行ったが、ボール判定。

再び抗議するも、樫本は相手にしない。

元々、樫本は判定で贔屓とかはせず正確に判定する。一体どういうことなのか。

そして、続く4球目に事件が起きる。

吾郎はど真ん中へと投げた。

すると、その球はチェンジアップとなり、タイミングを外したバッターは空振り。

だが、

樫本「ボール！」

敵味方問わず、このジャッジに言葉を失った。

安藤監督も、空振りじゃないかと抗議に出るが、

樫本「はい、確かにストライクです。

ですが、ボールなんです。」

意味がわからない説明。

実は、樫本は吾郎がデッドボール恐怖症を克服できていないのを見抜いていたのだ。そして、小森がその事に気付いていることも見抜いていた。

その後、樫本は吾郎にインハイにストレートを投げない限りストライクをとらないと宣告。

更に、

樫本「安心しろ、たとえ手元が狂ったところで、運動神経のいいうちの打者には当たらん。

デッドボールを避けられずに死んだまぬけなお前の親父と違ってな。」

突然、おとさんのあの事を持ち出した挙げ句、侮辱したのだ。

安藤監督「か、樫本さん！
あんたそれは言い過ぎだ!!」

「あやまれ・・・」

吾郎「今すぐ手について・・・

おとさんにあやまれーー!!!」

吾郎は、樫本目掛けてボールを投げつけた。

寿也「危ない!!」

ゴツッ！　パリーン!!

続く

横浜リトルには勝てない・・・？　前編

吾郎は、樫本目掛けてボールを投げつけた。

寿也「危ない!!」

ゴツッ！　パリーン!!

吾郎の投じた球は、樫本のサングラスに直撃。サングラスは割れて地面に落ちた。

樫本「それ見ろ。

所詮、小学生の球なんてノーヘルで当たってもこの程度なんだよ。」

安藤監督「で、でも樫本さん・・・！

血が・・・」

樫本「大丈夫です。サングラスの破片で切っただけですから。」

左眉の辺りから出血していたが、何事もなく樫本は立っていた。

だが、それ以上に吾郎は納得していないことがあった。

吾郎「なんで・・・

なんで避けなかったんだよ!!

元プロのあんたなら全然避けられるはずだろ!!

それに、なんで人を怒らせるようなことをいってそんな」

樫本「さあな。
俺にもよくわからん。
ただ、今のお前の状況が他人事とは思えなかったからかもしれん・・・」

かつて、横浜リトルでプロを目指していた樫本。
ライバルとエースの座をかけた紅白戦の試合のこと。
樫本は、緊張のあまり全く力を発揮できず、対照的にライバルは完璧な投球でエースの座は手中に収めたかに見えた。
ところが、樫本がそのライバルの打席時に、打ち取ろうと力んだあまりデッドボールを与えてしまった。
結局、ライバルは直前の大会は絶望的に。
樫本はショックのあまり次の練習日を休んだ。どんな顔をしてライバルに会えばいいのか怖かったのだ。
その夕方、
ライバルはお見舞いに来たのだ。
ライバルは、先週のことを全く話さず笑顔で接してくれた。
樫本が先週の事を謝ったが、
『あはは、いいんだよ全然。デッドボールはね、避けられない方がわ

るいんだ。』

『え？』

ライバルは、プロが一流の選手はデッドボールをうまく避けること、それが出来なかった自分はまだまだヘタクソであること、樫本はこの日は調子が悪かっただけで本当は実力があること、そして、

『来週は練習出なよ。　夏の大会、僕の分まで頑張ってくれなきゃね！』

回想終わり

樫本「そう言って、俺を励ましてくれた。」

吾郎「・・・」

樫本「その彼がここにいたら、

人間がやる以上、間違いはあるさ。一流のメジャーリーガーだって間違えるんだ。

ただそれを避けられなかったおとさんがヘタクソだったんだ。

だから頑張れよ、吾郎。

ってな。」

吾郎「そ、その彼って・・・」

吾郎は、そのライバルが誰なのかに気付いた。

樫本「そう、
お前の親父、本田茂治だ。」
すると、樫本は吾郎にボールを投げ返した。
吾郎は右手で取るも、素手である右手に痺れと痛みが走る。

樫本「痛いか!?
そりゃ素手なら痛いだろうな!!
だが、あいつに残したかったものは死や痛みじゃない!!
そのボールを使った野球というゲームの楽しさだ!!」
吾郎「・・・」
樫本「そんな辛けりゃ野球なんかやめろ!!
だがやつは死ぬために打者に転向したわけじゃない!!
おまえに野球の素晴らしさとその勇気を残したかったからだろ!!!」

そう言って、樫本は試合を続行させた。グラウンドの選手も所定の位置へ戻る。
吾郎（そうだ！
おとさんが・・・

たった1つ、
俺に残してくれたものを！
俺は・・・!!）
吾郎の投じた1球は、
ビュッ　ズバーーーーン!!!!
樫本「ストライーク!!」
吾郎（おとさん俺、
また野球が好きになったよ！）

インハイへの渾身のストレートだった。

フルカウントになって6球目、
吾郎「行っくぞーーー!!!」
ビュッ　ズバーーーーン!!!!
樫本「ストライーク!!　バッターアウト!!」
吾郎「よっしゃーーー!!!」

これまたインコースのストレート。見事に空振り三振に打ち取った。

本田吾郎、完全復活!!!

だが、この後吾郎に現実を突き付けられる。

続く

横浜リトルには勝てない・・・？　後編

吾郎は、紆余曲折があったものの横浜リトル相手に三者三振に打ち取った。

ところが、

樫本「ゲームセット！」

ここで樫本から試合終了を告げられた。

あくまで、吾郎を立ち直らせるために試合を受けただけであって、これ以上は無意味だと判断したからだ。

しかし、これでは納得いかないのは吾郎。横浜リトルの４番と勝負しろと要求。

だが、樫本が吾郎の相手に指名したのは、寿也だった。

樫本は寿也にアドバイスを送った。

そして、吾郎ｖｓ寿也の１打席勝負は、

カキーーーン!!

寿也は吾郎のストレートを、センターへと弾き返した。

何故、打てたのか。

それは、吾郎がストレートだけしか投げないからだ。

ストレートしか来ないとわかった以上、横浜リトルのバッターなら
タイミングを合わせるのは容易いこと。たとえ、全国クラスの４番を
打ち取ったストレートであろうと。
打ち取るために本当に必要なものはタイミングであること。

そして、樫本はハッキリと言った。

今のままでは、横浜リトルには通用しないと。

その翌日、ドルフィンズが練習するグラウンドの隅で、吾郎は悩ん
でいた。

おとさんは生前、吾郎に先ずはストレートを完璧に投げるフォーム
を身に付けろと教えていた。変化球はプロ入りしてからでも遅くは
ない。打たれたっていい。男なら直球勝負で行けと。

しかし、自信のあったストレートを幼馴染みの寿也に簡単に打ち返

された。

このままでは勝てない、一体どうすれば・・・

すると、吾郎はある言葉を思い出した。

『打者を打ち取るにはタイミングだ。』

吾郎（それだ!!）

吾郎は、練習を中断させて、思い付いた新たな武器。魔球G—1号を披露した。

打者のタイミングを外すのなら、変化球を使わなくてもいい。ならば、投球のタイミングをずらして打者のタイミングを外せばいいと吾郎は考えたのだ。

だが、そんな事は野球のルール上では禁じ手、不正投球でボークになる。

ならば、チェンジアップを投げればいいのかというと、あの時は、デッドボール恐怖症の影響で無意識に投げられただけなので、再び今同じ様に投げられるわけではない。

だが、小学生の頃なら、負担をかけずに投げられる変化球なので、変化球を覚えるのならチェンジアップが1番だと安藤監督は語った。

しかし、それ以上に横浜リトルに勝つには大きな問題があった。

それは、他のメンバーは吾郎と同じ様にそこまで野球に人生を懸けていないということだ。

勿論、合宿で上手くなってきたのは事実だ。

それでも、その事以上に問題なのは、エース吾郎が大会で連投するのは認められていないからである。

リトルリーグのルール上、間隔の空く1，2回戦は問題ないが、1人の投手に負担をかけないために、大会での連投は認められていないのだ。

どんなに才能があっても、まだ小学生。体が出来てない状態で連投での無理が祟り野球生命を絶たれないためのルールなのだ。

だが、

吾郎「待てよおじさん!!

ピッチャーは俺だけじゃないぜ！

相田がいるじゃないか!!」

マナ「え!?　あたし!?」

そうだ、思えば、久喜リトル戦でマナはリリーフ登板をし、無失点の好投を見せた。

吾郎とマナのツートップ体制なら、もしかすると・・・

小森「そうだよ！
それなら、もしかしたら行けるかもしれない！」

マナ「で、でも・・・
あの時は、夢中に投げただけだから。」

小森「大丈夫だよ！
あの久喜リトル相手にいいピッチングができたのだから、練習すればもっと横浜リトル相手でもいい勝負ができるよ！」

沢村「ああ！
俺達がもう少しうまくなれば、全国も夢じゃなかったりして・・・？」

前原「まあ、俺達もそこそこ頑張れば、案外行けちゃうなんてことも。」
夏目「あるかもしれないな・・・」

意気上がるドルフィンズ。

しかし、安藤監督は難しい顔をしていた。

そこまでしてまで、彼等に厳しく教えることはできるのか・・・

その覚悟は全員あるのか、

その事を問うことが出来なかった。

続く

目指せ！　全国！

個室で1人、安藤はビールを飲みながらテレビのプロ野球中継を見ながら悩んでいた。

解散寸前だったドルフィンズが漸く立ち直り、チームとして再起した。

だが、これから強くなるために厳しい練習をさせていいのだろうか？

厳しい練習をさせるあまり、子供達は付いてこれずにやめてしまった過去がある。

簡単にやめてしまうのではないか？

チームの為に存続させるには、厳しい練習をさせるわけにはいかない。

今のご時世、スパルタ指導では子供達はついてこれない。

だが、皆が吾郎みたいにやる気になってくれれば・・・

その時、

ズパーン！

乾いたミットの音が聞こえる。

安藤は、ベランダへ出てみると、

吾郎「いい感じじゃん沢村。」

宿舎の外で、沢村が投球練習をしていた。

実は、大浴場で入浴していた吾郎達、その際、吾郎は沢村にピッチャーしてみないかと提案したのだ。

更に、

ズパーン！

マナも投球練習をしていた。だが、受けていたのは小森ではなく六花だった。

実は、六花がマナの球を取りたいと立候補したのだ。マナは最初は難色を示したが、六花の強い意思でやってみることに。

最初は緩いボールを投げたところあっさりキャッチ。

更に、それなりに速いボールを投げると、それもキャッチしたのだ。

何故捕れたのか？

それは、六花の動体視力の良さだった。

六花は競技かるたをやっている。競技かるたで培った動体視力が、キャッチャーをやる上で適していたのだ。

そんな吾郎達の姿を見た安藤は心を打たれた。

時代や環境を言い訳にして子供達の顔色を伺う監督になってしまっていた。

結局、自分が夢から逃げていたんだ。

それを、今目の前で目を輝かせながら頑張っている子供達に気付かされたのだ。

そして、安藤監督は決意する。

たとえ厳しい練習で子供達に嫌われても、努力すれば夢が叶うというのを教えるんだと。

その為に、自分は鬼になると。

翌朝の練習で、

「マラソン!!?」

安藤監督は、メンバーにマラソンさせることにした。往復２０ｋｍの山登りコースを走らせるのだ。

かつては、このマラソンを入団テストにしていた安藤監督。

だが、あくまでこれは実力を確かめるのではない。

皆のやる気を見るためだ。そのマラソンに耐えられるのなら、どんな厳しい練習も耐えられるはず。

そして、安藤監督はこう宣言した。

もし、やめたい場合は、途中で走っているバスに乗って帰ればいい。

だが、もう三船リトルのグラウンドに来なくていいと。

様々な反応が飛ぶなか、吾郎は安藤監督が本気になってくれたことを喜んでいた。

こうして、三船ドルフィンズ全員は、グラウンドを飛び出して、山頂を目指して走り出した。

安藤監督は、全員帰ってくる事を信じて、グラウンドで1人待ち続ける。

先団グループは、吾郎、マナ、沢村、小森の４人。続いて、前原、夏目、鶴田、田辺、長谷川の５人。六花と薫は早くも遅れ始めていた。

山道の中腹、吾郎達４人は速いペースで進んでいたが、

小森「はあ、はあ」

小森の息が上がり始めた。

マナ「小森くん大丈夫!?」
小森「う、うん・・・
先行ってて。
皆のペースが速すぎて・・・」

吾郎「無理することはないんだ。
時間はあるんだ。自分のペースで登ってこい。」

マナ「あたしも、これ以上はついていけないかも・・・」
吾郎「相田も、ゆっくりでいいからな。」

こうして、吾郎、沢村は先を進んでいった。

吾郎は言うまでもないが、沢村も元はサッカーをやっていただけに、スタミナとスピードは優れていた。

２人は仲間の心配をしながら、全員戻ってくることを信じて、走り続ける。

一方、前原たち５人はというと、

前原「やめたやめた！
勝手にやってくれってんだよ！」

前原が音を上げたのだ。

夏目が説得するも、他のメンバーも５人で一斉にやめれば、監督も

流石にやめさせられないだろうと提案する有り様。

そんな中、更に遅れて走っていた清水と六花がやって来た。

前原「おーい、清水に菱川。
お前らも一緒にバス乗って帰らねーか？」

前原は、どうせ馬鹿馬鹿しいと思ってるんだろ？と思い、２人にも提案してきたのだ。

だが、

清水と六花は走り続けた。

田辺「おい、お前ら本気かよ!?」

前原「やめとけよ！
運動苦手なお前らが完走できるわけないだろ！」

それに対して、

清水「そんなものやってみなくちゃわからないだろ。

何早々とくだらない相談をしてるんだよ！」

六花「最初から出来ないと決めつけるなんて、
男らしくないわ！」

そう言い残して、２人は走り続ける。

その言葉を受けて、長谷川、夏目、鶴田、田辺は再び走り出した。

前原は最後まで反発したが、再び走り出した。

そして、日が西へと傾きつつあった頃、

吾郎、沢村が到着。

続いて、マナ、小森が到着。

その後も次々とメンバーが帰って来た。

そして、太陽が山へと隠れつつある時、

最後尾を走っていた、六花、清水、そして前原が到着。

到着した時は、吾郎達が出迎えてくれた。

この時、吾郎達三船ドルフィンズは、大きな自信を掴んだ。

行ける、いや、行くんだ全国へ!!

その夜、流石に山道２０ｋｍは辛かったか、疲れのあまり全員ぐっすりと寝ていた。

その早朝、

吾郎はただ１人、宿舎の外を走っていた。彼のスタミナは無尽蔵というのか。

そして、ちょうどグラウンドの辺りと通りかかった頃、誰かが的当てをしていたのを吾郎は見かけた。

続く

新たな出会い　吾郎ｓｉｄｅ

吾郎がジョギングしていた時、グラウンドからボールがバックネットの壁に当たる音が聞こえた。

吾郎「何だろう？」

気になった吾郎は、グラウンドで行ってみると、

ツインテールの女の子が、１人で投球練習をしていた。

その様子を吾郎は見ていた。

ビュッ　ズパーン！

吾郎「へぇー、いい球投げるじゃん。」

???「!?

誰!?」

女の子は、吾郎の方に目を向けた。

???「？

あなたは？」

吾郎「いや、

ちょっと朝練中にここを通ってたら君を見かけて。」

???「そ、そうなの・・・」

吾郎「結構いい球投げるからビックリしたよ。」

???「え、ええ。

でも、私なんて野球を始めて数ヶ月しかやってないし、まだまだわからないことはいっぱいあるから・・・」

吾郎「でも、さっきの球はよかったよ。

始めて数ヶ月でこれなら充分スゴいよ。

もっと練習すれば、チームのエースにだって夢じゃないよ。」

???「そ、そうかな・・・？

でも、私のいるチームはとっても強いし・・・

それに、強いピッチャーもたくさんいるし」

吾郎「ダメだよ弱気になっちゃ！」

???「え？」

吾郎「本当はいい球を投げれるんだし、もっと練習すれば、もっと強くなるんだよ！

だから自信持ってよ！

大丈夫！

俺は、絶対に君はエースになれると思うぜ！」

???「ほ、本当に・・・？」

吾郎「うん！

じゃあ、最後に俺がバッターボックスに立って君の球を見てみるから。」

???「う、うん。」

吾郎はバッターボックスに立つ。そして、女の子は渾身のストレートを投げ込んだ。

ビュッ　ズバーーン!!

吾郎（・・・!?

スゴい！

バッターボックスで見ると、もっと速く感じる！）

???「あ、あの・・・

どうだった・・・？」

吾郎「スゴいぜ！

絶対にエースになれるよ!!」

???「本当に!?」

吾郎「ああ！
俺が言うんだからな！」

女の子は、吾郎の目を見て、その言葉は本心で言ってると感じ取った。
???「ありがとう・・・！

私、あまり自分に自信が持てなくて・・・

でも、貴方の言葉で自信が持てたよ。

これから、もっと頑張ってみる！

そして、いつか貴方と試合が出来るといいね。」

女の子は、これまでに笑顔で吾郎に言った。

吾郎「・・・!?…／／／

じゃ、じゃあ、俺はランニングと途中だったから、

こ、これで！」

吾郎はあたふたしながらグラウンドを後にした。

???（行っちゃった・・・

お礼、言えなかったな・・・

きっと、何処かの強豪チームの子なんだろうけど、

名前聞いておけばよかった・・・）

対する吾郎も、

吾郎（や、やべえ・・・！

何でドキドキし始めたんだ!?

それに、あの子の事を思い出すと・・・！）

その数時間後に、２人が再開するのだが・・・

それは、もう１つの出会いを書いてから書くことにしたい。

続く

新たな出会い　マナｓｉｄｅ

吾郎が早起きしてランニングを始めてちょっと経った後、マナも起きて散歩をしていた。

その道中で、

キャア！

マナ「な、何!?」

誰かの悲鳴が聞こえて行ってみると、

???「いたたた・・・」

女の子が尻餅をついていた。

マナ「あ、あの・・・

大丈夫ですか?」

???「え、ええ・・・

ちょっと、木を登っていたら、落っこちちゃって。」

マナ「何かあったんですか?」

女の子は、上の方を指差すと、

子猫が木の枝の上で怯えていた。

???「朝、散歩していたら、猫の鳴き声がしたから。」

マナ「降りられなくなったんですね。」

???「かわいそうに、きっと一晩中震えていたんだわ。」

マナ「そうなんですね。

よしっ！

任せてください！」

そう言うと、マナは木を登り始めて、子猫のところへ。

マナ「大丈夫だよ。

よーい、いい子いい子。」

マナは子猫を捕まえて、木から降りていく。

しかし、

ツルッ

マナ「あ！」

???「危ない!!」

マナが足を滑らせて木から落下。尤も、高さ５０ｃｍからの落下だったが。

???「大丈夫!?」

マナ「あははは・・・

大丈夫大丈夫。」

子猫をしっかりと受け止めていたマナ。

子猫はそのまま立ち去っていった。

マナ「もうあんな危ない場所に行っちゃダメだからねーー!」

???「よかった・・・

!?

貴女、肘から血が・・・」

マナは、左肘を擦りむいていた。恐らく、木から落ちた時だろう。

マナ「大丈夫ですよ。

これくらいへっちゃらです。」

???「ダメよ。」

すると、女の子はハンカチでマナの左肘を結んだ。

マナ「でも、そのハンカチ・・・」

???「いいの、
名誉の負傷だから、そのお礼。」
マナ「あ、有難うございます。

あ!?
そうだ、そろそろ宿舎に戻らないと!」

???「宿舎?
貴女もここに野球の合宿へ?」

マナ「はい!
あたし、相田マナです!

あれっ、貴女もということは?」

???「ええ、

私は川瀬涼子。

チームの合宿に参加しているの。」

マナ「そうだったんだ・・・

あ!!

このハンカチ、必ずお返ししますから!!」

マナは、そのまま急いで宿舎へと戻っていった。

涼子(マナちゃんか・・・

また会えるといいわね・・・）

マナ（涼子さん、綺麗な人だったなあ・・・

でも、ハンカチを返そうにも、チームや連絡先がわからないとどうしようもないし・・・

どうしよう・・・）

マナは、ハンカチの事で頭がいっぱいだった。他人の物だから返さないといけないにも、名前だけ知っていても返す術はない。

マナ（そういえば、彼女も合宿に参加していると言ってたっけ？

監督さんに聞いてみよう）

しかし、マナと涼子も、数時間後に再開するのだが、２人は知るよしもなかった。

一方で、朝食から練習中も、ただ1人上の空となっている吾郎なのだが、それが後々ちょっとしたトラブルに繋がるのである。

続く

新たな出会い　三船リトルｓｉｄｅ

マラソンを全員完走し、その日の夜は殆どのメンバーは疲れのあまり夜はぐっすり寝ていた。

その翌日の練習、

安藤監督のノックの嵐に大苦戦の三船ナイン。

一方、小森と沢村、マナと六花は別メニュー。

沢村の投球練習、六花の捕手の練習が目的だ。

沢村は、コントロールが良くなってきて、六花もキャッチング等がそれなりに上達してきた。

その様子を見た前原達はやや不満げな様子。

そんな中、

前原「？
なんだあれ？」

前原が指差した方向に1台のリムジンが止まった。

すると、降りてきた1人の女の子が、グラウンドの方へ入ってきたのだ。

「皆様、ごきげんよう。」

口調、服装からお嬢様らしき女の子だ。

前原「監督、誰なんですか？」

安藤監督「いや、私も知らないが・・・」

すると、女の子はブルペンにいるマナに手を振った。

マナ「？

えええ!!?

ありす!!?」

六花「え？

ありすってまさか!?」

マナが驚いてありすと叫んで、六花も驚き、２人でそのありすという子がいるところへ。２人の様子に気づいた小森と沢村も着いてきた。

マナ「ありすー！　久しぶり!!」

ありす「マナちゃん、六花ちゃん

頑張っているようですね。」

六花「ありす、よくこの場所がわかったわね。」
ありす「色々と調べさせてもらいましたわ。

三船ドルフィンズ、かつては全国大会出場の名門チーム。しかし、近年はメンバー不足で存続の危機に立たされたものの、エースの本田吾郎を筆頭に活気あるチームになりつつあると。」

六花「よく調べたわねそういうこと。」

ありす「はい、マナちゃんと六花ちゃんも頑張っていることも知っていますわ。」

安藤監督「2人の知り合いかね？」
マナ「はい。四葉ありす、あたしと六花の幼稚園の頃からの友達です。」

安藤監督「四葉・・・

ええええーーーーー!!!?」

小森「どうしたんですか監督!?」

安藤監督「ま、まさか君、四葉財閥のお嬢様!!?」

ありす「ええ、よくご存じですわ。」

そう言ってありすは、名刺を渡した。

それを見た三船ナインもビックリ仰天。

そんな中、吾郎はベンチでぼんやりと座っていただけだった。

安藤監督「おっと、そんな事をしている場合ではない。

１０時から隣のグラウンドで横浜リトルと南武リトルが試合をするそうだ。

今年の1位と2位の対戦だ。勉強のためにぜひ見学しておこう。」

それを聞いたノック組は大喜び。

小森は吾郎を呼び、ありすもドルフィンズ一行と同行することにした。

グラウンドへ来たとき、横浜リトルの練習中だった。

安藤監督は横浜リトル監督の樫本に挨拶し、メンバーは横浜リトルのノックを見て、先日同様驚きを隠せなかった。

そして、マウンドに立っていたのは、

前原「あれ？　今日の先発、この前見た変化球野郎じゃないぞ？」

沢村「そりゃ、横浜リトルには他にもピッチャーはいるだろ。あれ？」

すると、あることに気付いた。

沢村「なんだあいつ、髪の毛ツインテールだぞ。」

小森「ツインテールって、まさか・・・？」

それを聞いた吾郎は、

吾郎（ツインテールか…

そういやあの娘もツインテールだったかな…）

そして、そのツインテールのピッチャーの顔を見た吾郎とドルフィンズのメンバーは、衝撃を受けた。

「お、女ーーーーーー!!!?」

吾郎（え?

なんであの娘が・・・!?）

続く

どうしたの本田くん？　（前編）

ドルフィンズのメンバーは動揺していた。

なんと、今日の横浜リトルの先発は、ツインテールの女の子だからだ。

皆が動揺する中、清水は、

清水「ちょっとちょっとー、何女くらいで驚いてんのよー、ここにもこーんなかわゆい、野球やる女がいるじゃなーい。」

沢村「バカヤロー！
横浜リトルでピッチャーやってるってことは、相当野球が上手いってことなんだよ。
下手の横好きなてめーとかわけが違うだろ！」

清水「ガーーーン!!Σ（。д。lll）」

マナ「横浜リトルのピッチャーの女の子・・・」
六花「マナ、前に横浜リトルの練習に本田くんと一緒に行ったでしょ？　あの子はいたの？」
マナ「ううん、いなかったと思うよ。」

更にマナは横浜リトルのベンチを見ると、

マナ「!?

ま、まさかね・・・」

今朝会った子にそっくりな女の子がいた。

そして、吾郎は、

吾郎（あの娘が・・・

横浜リトルのピッチャーだったなんて・・・

けどオレ、

また会えただけで、どうしてこんなに心臓がドキドキしてんだ・・・）

吾郎はまだ気づいていなかった。

彼女に恋していることを。

一方、南武ベンチは、

南武コーチ「練習試合とはいえ、新人の女の子が先発ですか。」

南武監督「ウチもなめられたもんだな。」

対する横浜ベンチ、

会長「大丈夫かね？　いくらウチのＯＢの娘さんとはいえ、一軍昇格早々いきなりこんな場面で試合に出させて。
しかも、今日はもう1人投げさせるらしいが、この子も新人の女の子らしいじゃないか。」

樫本「心配いりませんよ、会長。
坂上は、２軍でもう学ぶことはほぼないと言っていいでしょう。
今回、一軍の中にいて通用するのか、そのテスト登板として上がってもらいます。

もう1人の彼女は、先日まで本場のリトルで投げていました。」

会長「ほ、本場!?」

樫本「彼女は数日前にアメリカから帰って来た帰国子女です。
ウチのユニフォームを着るのも日本で投げるのも今日が初めてです。

いわばこれは、彼女の入団テストを兼ねた登板でもあります。」

そして、１０時に、

球審「プレイボール!!」

寿也「あゆみちゃん、思いっきり、いつも通りに！」

あゆみ「うん！

皆さん、よろしくお願いします！」

真島「ああ、頼むぞ！」

先発マスクを任された寿也の声に応えたあゆみ。そして、バックとホームベースへと一礼した。

注目のなか、第1球。

大きく振りかぶり、

投げた

ビュッ　ズパーン!!

球審「ストライーク!!」

長谷川「うおっ、はえー。」

六花「やっぱりすごいね。」

マナ「うん。」

吾郎（そりゃそうだろ。

俺が今朝見て、いい球だと思ったからな）

彼女の一球に周りは感心するなか、吾郎は何故か誇らしげに思っていた。

南武監督「気を付けろ、女でも球は来てるぞ！」

南武バッター「見りゃわかりますよ。」

続く2球目、

ビュッ　カーン！

バットに当てるもファール。

長谷川「うわあ、当ててきたぞ！」
前原「この人たちすごすきましゅー！」

そして、3球目、

ビュッ　カーン！

高々と上がった打球はサードフライ。

南武バッター「だっせえ、仕留めたはずなのになあ。」

続くバッターも、セカンドフライ。

3番バッターには、

ビュッ　ズパーン!!

チェンジアップとストレートのコンビネーションで三振に打ち取った。

あゆみはベンチへ戻っていくと、

樫本「ナイスピッチングだった。

合宿が終わったら、一軍に合流しろ。」

あゆみ「本当ですか!?」

樫本「今日はもう上がっていい。」

あゆみ「はい。」

寿也「おめでとう、あゆみちゃん。」

あゆみ「ありがとう寿也くん。」

かれん「いいピッチングだったわ。秋の大会、一緒に頑張りましょう。」

あゆみ「はいっ！」

一方、吾郎は、

吾郎（なんで、試合なんて見ないで、

あの娘の事ばかり俺は見てるんだ・・・）

横浜リトルの攻撃時、真島がスリーランホームランを放って三船ナインが驚いてるときも、彼女の方しか見ていなかった。

２回表、続くピッチャーは、

マナが出会った三つ編みの女の子だった。

マナ（やっぱりあの人だ！）

沢村「また女が出てきたぜ！」
夏目「横浜リトルの選手層どうなってるんだよ！」

そんな彼女も、

あのジョー・ギブソンを彷彿とさせるフォームから投げる球で、3者続けて内野ゴロに打ち取った。

安藤「成る程。
ムービングファストボールだな。」

マナ「ムービングファスト？」
安藤「ストレートと同じくらいのスピードで、手元で変化する球なんだ。
あのジョー・ギブソンが得意とする球なんだよ。」

そんな解説も、吾郎の耳には全く入って来なかった。

吾郎（俺、何で試合なんて観ずに、あの娘の事ばかり見てるんだ・・・!?）

マナもマナで、あの娘の事が気になっていた。

マナ（キレイな人だなあ・・・

それに、ピッチャーとしてスゴい人だなんて・・・）

その裏、横浜リトルの攻撃中。

カーン

ファウルボールがドルフィンズの一団の近くへ飛んできた。

あゆみ「あ、私捕ってきます。」

寿也「うん、」

あゆみ「あの、
すみません。」

吾郎（うわわ、
こっち来たー！）

ファウルボールを小森が捕って、彼女に渡そうとしたとき、

あゆみ「あ、も、もしかして・・・

朝、私に。」

吾郎「や、や、

や、やあ・・・」

沢村「え？
おい本田、知り合いか？」

吾郎「え、いや、
まあ、ちょっとね・・・」

小森「はい、ボール。」

あゆみ「ありがとうございます。

あの、今朝は、ありがとう。

貴方のお陰で、今日はいいピッチングができたよ。

私は、」

カーン

ファウルボールが目の前に飛んできた。

沢村「うわあ！
こっち来た!!」

気づいて慌てて逃げようとするも、あゆみは後ろ向きなので、全く気づいていなかった。

吾郎「危ない!!」

すると、吾郎はあゆみに飛び付き、危機一髪、ボールに当たらずに済んだ。

吾郎「だ、大丈夫？」

あゆみ「え、ええ・・・

ありがとう・・・」

この2人のなんとも言えない空気と吾郎のとっさの行動で、三船ナインの空気もおかしな事に。

そして、何よりその様子が全くもって面白くない1人のメンバーがいることを、まだ誰も知らなかった。

続く

どうしたの本田くん？（中編）

夜遅く、吾郎は1人自動販売機前のソファーに座っていた。

吾郎（今までこんな遅い時間に寝られなかったことは無かったのに、

どうしちゃったんだ俺・・・）

そこに、

マナ「あ、本田くん、どうしたの？」

吾郎「うわああ!!
って、相田か。」

マナ「本田くんが寝られないなんて、珍しいね。」
吾郎「い、いや、別に、
のど乾いてジュース飲みに来ただけだよ。」
マナ「そうなんだ。

兎に角、夜更かしは体に良くないよ。

明日も練習もあるから。

じゃ、おやすみ。」

マナは水を買ったあと、部屋へと帰っていった。

吾郎（今朝、あの娘に会ってから、
1日ずっとあの娘の事が頭から離れられないなんて・・・

これって、もしかして・・・）

鈍感な吾郎でも、流石に自分が今どんな感情なのかはわかっていた。

そこに、

「なーにしてんのよこんな時間に。」

吾郎「うわあ！

って、なんだ清水か。」

清水「あんたがこんな時間まで起きてるなんて、明日台風でも来るんじゃないの？」

吾郎「ば、バカ言え!!

のどが乾いたからジュース飲みに来ただけじゃねえか・・・！」

そんな吾郎の慌てた反応に清水は、

清水「ふーん、

のどが乾いて寝られないほど、

あの娘の事を考えてたんだ？」

吾郎「」ギクッ

清水「ま、あたしには関係ないけどね。」

吾郎「バ、バカヤロー！

べ、別にあの娘の事とはかんけーねーよ!!」

清水「あら、そーですか。」

吾郎「第一、お前こそ何しに来たんだよ!!

いっつもすぐイビキかいて寝てるクセによー!!」

清水「失礼ね!!

あたしイビキなんてかいてないわよ!!」

吾郎「そりゃ知るわけねーよな!!

グースカ寝てるんだからな!!」

清水「ぐぬぬぬ・・・!!」

吾郎「ちぇっ、

同じ女でも大違いだぜ。

かたや、俺のアドバイスを素直に聞いてちゃんとお礼を言える女の子。

かたや、俺の左腕を骨折させたじゃじゃ馬だもんな。」

清水「な、なんだとーーー!!」

「あ、貴方達、確か。」

２人の言い争いの最中、現れたのは、

あゆみ「また会えたね。」

吾郎はあゆみを見て顔を赤らめる。

あゆみ「そうだった、私達、自己紹介していなかったね。
私は坂上あゆみ、４年生。」

吾郎「ほ、本田吾郎、４年生・・・」

あゆみ「吾郎くん、
いい名前だね。

あの、朝、貴方のアドバイスのお陰で勇気をもって試合に出ることが出来たの。
本当にありがとう!」

吾郎「い、いや、まあ・・・

でも、こんな時間に起きてどうしたの?」

あゆみ「今日、初めての一軍の試合に出て、興奮しちゃって寝られなかったから、ジュースを買いに来たの。

それに、吾郎くんにお礼を言えなかったのもあるかも。」

吾郎「そ、そう・・・」

吾郎はあゆみが差し伸べた手を交わす。

あゆみ「吾郎くん達はいつまで合宿なの。」

吾郎「明日、までかな？」

あゆみ「そうなんだ…

私達は明日の朝には帰っちゃうけど、同じ神奈川のリトルだから、
また一緒に試合ができるかもしれないね。」

２人の話している様子に、あまり面白くないのが清水。

吾郎（・・・ど、どうしよう。

いきなり住所なんて聞けないし、

何か、きっかけを・・・）

吾郎が考えたのは、

吾郎「そ、そうだ!!

卓球やらない？

今卓球にハマってんの！

だから、

一緒に、いい汗、かかない？」

吾郎は近くに卓球台を見て、卓球に誘おうと考えたのだ。

吾郎（し、しまったー！

これ絶対まずい誘いだよー！）

あゆみ「・・・

ええ、いいよ。

私、まだ寝られそうにないから。」

吾郎「ほ、本当に？」

あゆみ「うん。」

吾郎「やったー！」

その様子に唖然とするのが清水。

吾郎は、そこでうまく行けば、住所も聞こうという魂胆らしい。

ラケットをあゆみに渡すとき、

吾郎「あれ？

君まだいたのー？

子供は早く寝なさい。」

完全に吾郎は有頂天になっていた。

あゆみ「でも、みんなでやった方が楽しいよ。」

吾郎「えー、でも、あいつ運動音痴だから一緒になってもつまんねーよ。」

あゆみ「そ、そんな酷い言い方しなくても・・・」

吾郎「まー、あゆみちゃんが言うなら3人でやっても、」

清水「結構よ!!」

吾郎「!?」

清水「あたし卓球なんて大っ嫌い!!

2人で仲良くどーぞ!!」

完全に怒りが爆発した清水、怒って出ていってしまった。

吾郎「な、何キレてるんだあいつ・・・

さ、さあ、一緒に卓球を」

あゆみ「なんでそんな酷いことが言えるの!?」

吾郎「え・・・」

あゆみ「あの子は吾郎くんのチームメイトなんでしょ!?
仲間なんでしょ!?
そんな酷いことを言うなんて!!」
吾郎「い、いや、
それは、その・・・」
突然怒り出したあゆみに対してしどろもどろになる吾郎。
あゆみ「私だって、運動なんてこれっぽっちも出来ないし、野球だってピッチング以外はまだまだ全然できないし・・・
どう？　そんな私に幻滅したでしょ？」
吾郎「そ、そんなはずないよ!!」
あゆみ「だったら、なんであの子にはそんな事が言えるの!?
あの子の事が嫌いなの!?」
吾郎「嫌いなもんか!!」
あゆみ「!?」
吾郎は、清水と一緒に野球するのが楽しいこと、ちょっと口は悪いけど練習は真面目に取り組んでいること、アメリカ旅行の事をあゆみに話した。
あゆみ「そうなんだ・・・

でもよかった。

吾郎くんは清水さんの事が嫌いじゃなくて。」

吾郎「え？」

あゆみ「吾郎くん、とっても仲間思いなのね。

さっきの話を聞いて、大切な仲間なんだってわかったよ。」

吾郎「そ、そう・・・

ごめんっ！」

あゆみ「え？」

吾郎「そ、その俺、

何も考えずに、アイツの事を傷付けてるのを気づけなかった。」

あゆみ「ううん、謝るなら清水さんに謝って。」

吾郎「そ、そうだよな・・・」

あゆみ「それから、次会うときは、必ず仲直りしてね！

約束だよ！」

吾郎「うん、わかった！」

あゆみ「じゃあ、卓球やりましょう！」

吾郎「うん！」

吾郎とあゆみは指切りを交わした。

あゆみの言葉で、吾郎は清水の思いを気付くこと出来たかはわからない。

だが、女の子に対するデリカシーに関しては、少し理解したのかもしれない。

卓球の方は、あゆみが全く卓球をやったことないので勝負にならず、吾郎があゆみに卓球を教えていた。

あゆみ「楽しかったね。」
吾郎「そ、そうだね・・・」
あゆみ「あ、そうだ。」
あゆみはテーブルにあったペンとメモ書きを取って書き始めた。
あゆみ「あの、これ、私の電話番号。
また、今度、一緒に遊ぼうね。」
吾郎「え、いいの？」
あゆみ「うん。　ちゃんと、清水さんと仲直りしてね。」
吾郎「う、うん。」
あゆみは部屋へと帰っていった後、吾郎はあゆみ宅の電話番号が書かれたメモ書きを持って、嬉しくて小躍りしていた。

続く

どうしたの本田くん？（後編）

翌朝
ドルフィンズの合宿はいよいよ最終日、同じ最終日でもリトルによっては早く帰るチームもいる。

例えば、名門横浜リトルだ。

真島「さて、合宿も終わればすぐに大会か。」
江角「まあ、地区予選はフリーパスだな。」

寿也「あゆみ、合宿で一段と上手くなったね。」
あゆみ「そ、そうかな。
やっぱり、吾郎くんのお陰かな。」

かれん「いきなり小学校最後の大会だけど、貴女の頑張りが大きな鍵になるかもしれないわね。」
涼子「いえ、そんな私なんて。」
かれん「それくらいの気持ちで頑張って欲しいと、監督は思っているかもしれないわ。」
涼子「そうですね。頑張ります。」

メンバー全員、バスに乗って出発を待っていた。

樫本「よし、全員乗ったな。」
「はいっ！」

樫本が乗ろうとした瞬間、

「あの、すみませーん!!」

寿也「確かあの子は、」
マナがバスの方へ向かってきたのだ。

樫本「なんだ相田か。
悪いがウチはもう出発するんだが。」

マナ「あの、横浜リトルの川瀬涼子さんに渡しておきたいものがあります。」

樫本は涼子を呼んだ。

涼子「もしかして、マナちゃん？
昨日の試合でもいたわね。」

マナ「はいっ。」

真島「アイツは確か、三船の。
ウチの涼子にナンパとはな。」
寿也「あの、あの子は女の子ですよ。」
真島「何っ？」

マナ「実は、これをお返ししようと思って。」
マナは涼子に昨日渡されたハンカチを返した。
涼子「これ、昨日の・・・」
マナ「はい。」

涼子「そうだったのね・・・」
すると、涼子は電話番号が書かれたメモ書きをマナに渡した。

涼子「今度、昨日のお礼をさせて、
バッティングセンターとかに行って遊びましょ？」
マナ「はいっ！　是非！」

その後、マナはバスを見送った。

午前

グラウンドでは素振りをするメンバーがいた。昨日に続いてありすも見学している。

一方で、吾郎はチェンジアップの練習（ボールを受けるのは小森）、六花は捕手の練習（ピッチャー役はマナ）をしていた。

その後、守備練習に入った際の事だ。

バタッ

沢村「おい、どうした清水!?」

猛烈な暑さもあってか、清水がふらついて倒れたのだ。

安藤「大丈夫かね!?」
清水「い、いえ、まだやれます。」

安藤「いかん、万が一の事があっては大変だ。
ゆっくりと休んでいなさい。
他のみんなも、体調がおかしいと思ったら直ぐに言ってくれ。」
前原「あ、あの～、
ちょっと俺、突然頭が痛くなって」
沢村「嘘つけー！　さっきまでピンピンしてただろうが！」

一先ず、清水はベンチで休むことに。屋根付きで日陰になっているので、暑さを凌ぐには丁度いい。
また、ありすがドクターを手配するとの事。

その間の出来事、
吾郎「よう、清水。」
吾郎がベンチの方へ来たのだ。
清水「な、何よ・・・！」
昨日の一件があるため、話しかけづらい清水。
清水（べ、別にアイツがあの娘と仲が良くたって、別にあたしには関係のない話だし!!）

吾郎「し、清水・・・」

清水「な、何よ・・・！」

吾郎「昨日の事、俺、お前に酷いことといっちゃったな・・・」

清水「そんな事を言うためにここに来たのよ？」

吾郎「ごめん！」

清水「え？」

吾郎「俺、あの娘の事で浮かれすぎてて、お前の事を考えずに言っちまった・・・

お前も女だし、あんなこと言うのは、傷つくよな・・・」

清水「・・・」

吾郎「それにさ、

俺、お前のドルフィンズで野球やるのは、めちゃくちゃ楽しいんだよ。

前に俺、お前に野球の面白さを保証するって言ったじゃん。

お前にその野球の面白さを全く伝えきれてねえな俺・・・」

清水（本田・・・）

結局、清水は軽度の熱中症だった。練習後に安藤が皆に頭を下げる

という一幕もあったが、誰も安藤の事を責めなかった。

こうして合宿は終わった。

三船リトルはこの合宿で確実に強くなった。

だが、吾郎と清水の空気は、険悪ではないが、何とも言えない微妙な空気が流れていた。

続く

一緒にがんばろーぜ

夏休み最後の練習。

練習グラウンドに三船ドルフィンズが帰って来た。

沢村「おっ、やっとギプスが取れたのか。」
吾郎「ああ、これで完全復活だぜ！

グローブをはめる感覚、やっぱりたまらないぜ！」

清水「おはよー。」
小森「おはよう清水さん。」
沢村「おう、清水。」
本田「清水、おはよう。」
清水「あ、小森、沢村、本田。
おはよう。」

本田（・・・

なーんか調子狂うな、
合宿終わってからあんな調子だし・・・）

監督が来る前に、沢村が実践形式でピッチングをすることに。合宿で3番手投手を兼ねることになった成果は果たして？

ビュッ!!　カキーン!!

ストライクゾーンへしっかり投げられるようになったが、吾郎の前ではまだまだ力不足のようだ。
吾郎「へぇー、コントロールはよくなったじゃん。」
沢村「そりゃどーも・・・」

沢村としては自信のあったボールをあっさり打ち返されてしまい、実力差を痛感させられた。

監督が来た際、吾郎はあることに気づく。

吾郎「あれ？　相田と菱川は？」
安藤「相田さんは体調を崩して来れないみたいだ。菱川さんは今向かってるとのことだ。

さあ、練習を始めるぞ。」
吾郎「珍しいな。」
沢村「あの相田がな。」

六花は数分遅れた後練習に参加、その後の特に大きなことはなく練習は続いたのだが、

清水「うおおー！

ありゃ。」（後ろに逸らす）

沢村「なあ、合宿の成果ってあったのか？」
小森「た、多分あるよ・・・」

清水は合宿前と変わらず外野ノックに悪戦苦闘していた。

一方、

ビュッ!!　パーン！（ミットがボールに弾かれる）

六花「いったたー」

吾郎「大丈夫か菱川!?」

六花「ええ、これくらい平気よ。」

六花はいよいよ吾郎のボールを受ける練習の段階まで入っていた。だが、マナや沢村の投げるボールと桁違いなスピード、球威に苦戦していた（それでも、吾郎はセーブしている方）。

その練習終わりの時、

安藤「ああそうだ菱川さん。」

六花「何でしょうか？」

安藤「相田さんに様子を見に行ってくれないか？　合宿で女の子には厳しい練習をさせてしまって、それで体調を崩したら親御さんに謝らなくてはいけないからね。」

六花「はい。私とマナの家は隣なので。」

安藤「ああ、頼むよ。」

吾郎たちは宿題の話をしていた。

沢村「おい、皆は夏休みの作文はやったか？」

小森「うん、僕はもうちょっとで終わるよ。」

吾郎「なあ、俺にそれ見せてくれないか？」

小森「ダメだよ。作文は自分でやらないと。」

吾郎「いいじゃん固いこと言わずにさ。」

清水「じゃあ、あたし先に帰るね。」
沢村「ああ、じゃあ始業式でな。」
吾郎「・・・」
吾郎は清水の後ろ姿をただ見つめていた。
吾郎（合宿の最後からあんな感じだし、
何なんだよ・・・）
清水はというと、
清水（これでいいんだ・・・
アイツとは・・・
下手でも、野球ができればそれで）
そして新学期、
清水の隣の席の吾郎だが、何とも微妙な空気になっている。
険悪では無いのだが、何とも言えない距離感というのを吾郎は感じていた。
清水も清水で、この日は学校に行きづらかった。あの一件で、まだ気持ちの整理が着いたはずなのだが、隣の席が吾郎というのが要因だったり
休み時間の間も、
沢村「変だよな・・・
本田と清水は喧嘩をしないなんてさ。

いつもはよくあることなのにな。」
小森「ま、まあ、喧嘩しないのは仲がいいってことだからさ・・・
(でも、何か変だ。
仲が悪いって感じはしないけど・・・)」
沢村や小森も違和感を覚えていた。

そして放課後、作文や絵をいい加減な内容で提出した吾郎は職員室に呼び出された。

吾郎「だってさあ、そういうの俺苦手だもん。
何書いていいかわかんねーし。」
先生「題材はいくらでもあるだろ?
例えばこれだ。」
吾郎「へぇー、小森結構いいのを描いてんじゃん。」
グローブとバットの絵を見て感心する吾郎。

先生「これは清水のだ。」
吾郎「え・・・!?」

先生から清水の作文を見せてもらった吾郎。
それは、ドルフィンズでの練習や試合のことが書かれていた。
すると、吾郎は先生の制止を振り切り、職員室を飛び出した。

教室に入ると、
吾郎「清水!!」
清水「・・・!?」

偶然教室に残っていた清水がいた。

吾郎「直ぐにグラウンドに来い!!」
清水「ってちょっと！
いきなり何なのよ!!」
吾郎「話はあとで説明する!!」

教室を飛び出すと、学校を出ようとした小森と沢村には、

吾郎「２人とも、グラウンドに集まってくれ！」

更に、丁度学校を出ていたマナ、六花もグラウンドへ来るように伝えて、安藤監督のスポーツ店からバットとボール、グローブを借りてきた。

グラウンドに集まった吾郎たち。

吾郎「小森、外野フライのノックを打てるか？」
小森「う、うん。」

吾郎「よし、清水、外野フライを捕る練習だ。
沢村と菱川は返球の処理、
相田は清水のバックアップを頼む！」

清水「ちょっといきなり何言い出すのよ!!

あたしは」
吾郎「見つけたんだよ!!
お前が外野フライを捕れる方法をな。」
清水「え？」
吾郎「俺言っただろ。

野球の面白さを保証するって、
外野フライを捕れないお前は、まだこれっぽっちも野球の面白さを知らないからな。」
清水「な、何ぃ!!」
こうして、小森が先ずノックを打ったが、
吾郎「おい！　右だ右!!
５ｍ右前方!!」
清水「わ、わかんねえんだよそれが!!」
結局捕れない。
吾郎「お前ちゃんとボール見てるのか!!?」
清水「見ててもよ!!
見ててもよ!!
できるかー!!」
吾郎「・・・
ちぇっ、
全くしょうがない女だぜ。
右手貸せ。」
清水「え？」
吾郎は清水を手を繋ぎ、

吾郎「じゃあ、俺がリードするっから。
だんだんと慣れていこうぜ。

よしっ！次!!」

沢村「あいつ、仲良く手を繋いでるぜ・・・」
小森（・・・そうだよ。
僕達友達なんだから）

マナ（やっぱり、
そうでなくっちゃね！）

カーン!!

吾郎「こっちだ！」
吾郎が清水を導いていく、

そして、

吾郎「よし来た!!
グローブを出せ!!」

清水がグローブを出すと、

スパーン！

清水のミットにボールが収まってた。

沢村「おお！　捕れた！」
小森「ナイス、清水さん！」

マナ「やったね！」

清水「あ・・・」
吾郎「ナイスキャッチ。」
清水「あの、あたし・・・」
吾郎「いいよ、別に。

俺、女心とかそういうの全然わかんねえけどさ。
お前とやる野球は、めちゃくちゃ楽しいんだぜ。」

清水「え・・・？」
吾郎「だからさ、お前の運動音痴なんか、俺が一緒に退治してやるよ。

今日はお前が1人で捕れるようになるまでその手を絶対に離さないからさ・・・

一緒にがんばろーぜ。」

清水「う、うん・・・！」

清水は思った、野球を出会えてよかったと。

続く

いよいよ大会！

吾郎と清水の件も解決し、２学期最初の練習。

カーン！
スパーン！

前原「おっ、やるじゃん清水！」
長谷川「大分良くなってきたな。」
清水「へへっ、まーな。」

あの日以降、清水の守備も飛躍的に上がり、

更に、

ビュッ　　スパーン！

小森「うん、いい感じだよ！
だいぶコントロールもまとまってきてるよ。」

吾郎「おう！」

吾郎もチェンジアップの精度が上がっていた。

他にも、マナもピッチャーとして成長し、六花は第２捕手として機能するくらいまで成長している（それでも、吾郎の球を捕るのには一苦労しているが）。

守備練習を終えて、安藤監督は全員に集合をかける。

安藤「いよいよ、来週から大会が始まる！」
前原「もう来週かよ！」
吾郎「よっしゃ！遂に試合だぜ!!」
安藤「1回戦の相手は本牧リトルだ！」
吾郎「ちぇっ、横浜リトルじゃないのか。」
沢村「勝手に1人でやってろよ・・・」
マナ「本牧リトル・・・？」
六花「強いのかしら？」
安藤「それは・・・
おじさんもわからない!!」
全員「だはーー!!」ズゴーー!!
安藤「兎に角、大会前ということでバッティングセンターで特打ちだ！　素振りしかさせてなかったからな！
お金はおじさんが持とう。」
「やったーー!!」
こうして、ドルフィンズのメンバーはバッティングセンターへ。

ドルフィンズのメンバーは９０ｋｍのストレートに挑戦。

ビュッ！　スカッ

安藤「なんだこのスイングは!?
素振りで固めたフォームを忘れたのか!?」

前原「い、いやあ、

体が素振りすることに慣れちゃってて。」

他の選手もバッティングに苦戦する中、

ビュッ！　カーン！

長谷川「おっ、やるなあ相田。」

田辺「ヒット性の打球ばかり打ってるぜ。」

マナは鋭い当たりを連発していた。

安藤（相田さんも良いバッティングをしている。投手運用も含めて、スタメンはしっかりと考えないといけないな）

吾郎「おじさん、オレあっちでやってていいかな?」
安藤監督からバッティングセンター用のメダルを受け取った吾郎は別のバッティングマシーンへ。

他のメンバーは、
沢村「いくぜ!!」
ビュッ　カーン
六花「えいっ！」
ビュッ　カツン
清水「うおおーー!!」
ビュッ　スカッ
当たる人もいれば、そうでない人もいたりといったところ。

そんな中、
吾郎「ちょっと！　さっきから1人で同じ場所を独占しやがって!!」
何やら吾郎が揉めている。
マナ「ちょっと!?
本田くんどうしたの!?」
マナが吾郎の元へ行くと、
何やら、吾郎と3人組の野球少年と揉めていたようだ。

吾郎「な、なんだ・・・

そーいうカラクリかよ。

早く言えよ・・・」

吾郎も不服そうな態度を和らげて納得した模様だ。

その3人組は顔が皆そっくり。三つ子のようだ。

???1「おいおい、お前どこのリトルリーガーだ？」

???2「俺達岡村三兄弟を知らないなんて、余程の弱小チームみたいだな。」

???1「聞いたことねーのか？

ほんもくのブラックトライアングル、俺達三つ子のことをな。」

吾郎「ほんもく・・・」

本牧(ほんまき)なら知ってるけどな」

???2「バカかあいつ。

本牧(ほんもく)の事をほんまきだと思ってやがるぜ。」

吾郎「ほんもく・・・

相田!!

1回戦の相手って確か、」

近くにいたマナに吾郎は訪ねる。

マナ「うん、
確か監督さんは本牧リトルって言ってたよ。」

すると、

???1「じゃあおめーらがウチと1回戦で当たる三船リトルってか。
こりゃラッキーだぜ。

こんなちっこいのがエースナンバーで、あの女がレギュラーの背番号を着けてるようだしな。」

吾郎「ああ？」

その時、打席に立っていた三つ子の1人の1打は鋭い打球でネットに直撃していた。

吾郎「へえ、こーいう打球を飛ばしてるようなら天狗猿になるのもなるわなあ。」

???1「なーに坊や。
こんなバッティングセンターなんてお遊びさ。

お前がさっき笑ったブラックトライアングルの恐ろしさを、来週の試合でたっぷりと見せてやるよ！」

1回戦の相手は本牧リトル。

自慢のブラックトライアングルとは一体なんなのか？

いよいよ、秋の大会だ!!

続く

強敵!?　ｖｓ本牧リトル！

マナ「行ってきまーす！」

ユニフォーム姿でマナは家を飛び出し、六花と共にドルフィンズのグラウンドへ向かった。

遂に大会の日がやって来たのだ。

４月からチームを立て直し、夏には合宿を敢行し力を付けたドルフィンズ。

果たして、激戦区神奈川でどんな試合をするのだろうか？

グラウンドへ集合してから、安藤監督が手配したバスで球場へと向かった。

神奈川県営野球場

開会式

代表選手の選手宣誓は、先日吾郎と揉めていた本牧リトルの三つ子の１人だった。

その事で文句を言う吾郎だが、代表の宣誓の時は前を向き、晴れやかな顔だった。

遂に試合することができる喜びを噛み締めながら。

そして、本田吾郎、初の公式戦の試合が始まる。

丁度その頃、1人の男がスタジアムに足を運んだことでちょっとした盛り上がりがあったことは別の話である。

試合前練習

ドルフィンズの守備練習時の本牧ベンチ。

岡村一郎「成る程な、あのチビ4年生でエースなんか。」

岡村3兄弟の長男、一郎は大会のパンフレットを見ていた。

岡村二郎「どうやらあのチビと一緒にいた女がセンターみたいだな。」

岡村一郎「しっかし、だっせーなあの守備は。」

岡村二郎「問題にもなってねーぜ。」

岡村三郎「これじゃあブラッドトライアングルの見せ場が作れそうにねーな。」

岡村一郎「センターの女がマトモに守れてるが、他があれじゃあ意味もないな。」

三船リトルのお粗末な守備練習を見て、完全に見下す岡村三兄弟。

岡村二郎「おっ、あのチビが投げるみたいだな。」
今度は吾郎の投球練習に注目する。

岡村三郎「誰が投げても同じだろ。俺ちょっとトイレ行ってくるわ。」

岡村三郎は全く吾郎の投球に興味を示さずトイレへ行こうとした。

その時、

ズパーン!!

ピッチャー、本田吾郎の投げるボールが、キャッチャー、小森大介のミットへ吸い込まれる音に、思わず岡村三兄弟は注目し、声が出なかった。

そうなることを想定していたのが、誇らしい顔で投球練習を終える吾郎。

そして、あの3人は、

岡村一郎「ほほう・・・」
岡村二郎「おもしれぇ・・・!」
岡村三郎「こいつはブラックトライアングルの格好の獲物だぜ!!」

吾郎をロックオンした岡村三兄弟。謎のブラックトライアングルが吾郎に、三船リトルに襲いかかる!!

リトルリーグ神奈川県大会　1回戦
三船リトルｖｓ本牧リトル

三船リトル　スタメン
1番　CF　相田
2番　SS　前原
3番　C　小森
4番　P　本田
5番　3B　夏目
6番　1B　田辺
7番　2B　長谷川
8番　LF　沢村
9番　RF　清水
ベンチ　鶴田　菱川

アナウンス『1回表、本牧リトルの攻撃は、1番　セカンド　岡村一郎くん。』

球審「プレイボール！」

長男一郎が左バッターボックスに立ち、球審の宣告と共に試合が始まる。

これが公式戦初試合の吾郎。

緊張する三船ナイン。

注目の1球目。

ビュッ

ズパーーーン!!!

球審「ストライーク!!」

目の覚める乾いた音と共に、吾郎の投じたボールはミットへと吸い込まれる。

一瞬にしてスタンドはどよめいた。

続く2球目はアウトロー一杯のストレートで追い込んだ。

続くボールはインハイに揺さぶりをかける。しかし、一郎は冷静だ。

そして、4球目。

ビュッ　ズパーン!!

球審「ストライーク！　バッターアウト!!」

吾郎「おい、でかいこと言ってる割にはおとなしいじゃねえかよ。もったいつけてねーで、早く見せろやブラックカスタネットというやつをよ!」

挑発する吾郎の声を無視する一郎。

その後、二郎と話していた一郎。吾郎のボールを情報を交換してい

るのだ。まだ初回、試合が終わったときに相手より1点でも多く取れば勝ちなのだ。

続く二郎は1球も振らずに三振。

吾郎「おいおいどした!?
ブラックカスタネット!!」

岡村二郎「カスタネットじゃねえ！　トライアングルだ!!」

流石に吾郎の挑発がしつこすぎたのか、言い返す二郎。

続く三郎も全く振る素振りを見せずに三振に終わった。

だが、岡村三兄弟は手応えを感じた。次の打席は行けると。

あっさり三者三振に終わり、楽観ムードの三船ナイン。
しかし、小森が感じる不穏な初回の全く振らない3人の様子、そして、何よりもあの横浜リトルに2ｖｓ1で敗れるも善戦した実績を本牧リトルは持っているのだ。

だが、本牧リトルのピッチャーは全く特筆する点が無さそうなのもあり、楽勝ムードの気配が漂う三船ベンチ。

吾郎「頼むぞ相田！」
マナ「うん、あたし、必ず塁に出るから！」
アナウンス『1回裏、三船リトルの攻撃は、1番　センター　相田さん。』

1球目、

ビュッ　ズバーン

球審「ストライーク！」

全く大したボールではない。それが吾郎は何か違和感を感じる。

何故あの横浜リトル相手にロースコアの接戦に持ち込めたのか？

そして、あの岡村三兄弟のポジションも確認する。

一郎はセカンド、二郎はショート、三郎はセンターだ。

そんな中、マナの２球目は、

カキーン!!

大きな打球がレフトへと飛ぶ。

沢村「行ったか!?」

墨審「ファール！」

ホームラン性の打球も、左へ切れてファール。

沢村「だあああ!!」

六花「惜しい!!」

惜しくも先制点を逃した三船リトル。

すると、命拾いした本牧リトルが動いた。

一郎「おい北浦（本牧リトルのピッチャー）、歩かせろ。」

なんと、マナを敬遠した。

マナ「え？　ええ!?」

突然の事で戸惑うマナ。三船ベンチもどよめく。

吾郎（どういうことだ・・・？
あいつらは1点でも取られたら負けだと思っているのか？）

続くのは2番前原。

安藤監督（よし、ここは、相手に揺さぶりをかけるぞ。　あのピッチャーの球速なら、足の速い相田さんなら十分間に合う。）

前原はバントの構えだ。

その初球、

一郎「なにっ！」

ピッチャーが投球動作に移ると、マナがスタートを切った。

そして、前原はバットを引いた。

球審「ストライーク！」

キャッチャーも投げられずにマナは悠々と二塁へ。

安藤監督（よし！　これで前原くんが送れば、次の小森くんなら最悪でも犠牲フライで1点が入る。）

安藤監督の策は上手く進んでいた。

しかし、

一郎「北浦、一塁を埋めろ。　後は何とかする。」

なんと、前原も敬遠だ。

ノーアウト1，2塁の場面で小森、吾郎へと繋がった。

安藤監督は、ヒッティングのサインを送る。送りバントが決まっても、次の吾郎が敬遠される可能性を見越してのことだ。

吾郎「どういうことだ・・・？

そもそも、あの横浜リトル相手に1点差なんて、一体。」

吾郎が考えるなか、小森への初球は、

小森（絶好球！）

自信をもって打った打球は長打コース！

ところが、

墨審「アウト!!」

吾郎「なにっ!!
戻れ！　相田!!　前原!!」

抜けたら長打の辺りをセンターの三郎がダイビングキャッチし、体勢を戻すこと無くすぐさま内野へ返球。　浮き足立ったランナー2人は戻れず、なんとトリプルプレーを喫した。

ややヒヤヒヤな岡村三兄弟も、プラン通りに無失点で切り抜けた本牧リトル。

そして、吾郎はアンラッキーだったという雰囲気の三船ナインと対照的に、本牧リトルの恐ろしさの核心に気付きつつあった。

吾郎（成る程な、
どうやら横浜リトルが2点しか取れなかった理由が少しわかってきたぜ・・・）

続く2回の吾郎のピッチングは全く危なげなく三者凡退に打ち取った。

続く三船リトルの攻撃。

アナウンス『2回裏、三船リトルの攻撃は、４番　ピッチャー　本田くん。』

初回はチャンスを作り、守りは吾郎が磐石、押せ押せムードの三船ナイン。

しかし、

スパーン

球審「ボール。」

なんと、吾郎を敬遠。ベンチからヤジが飛ぶ。

結局、フォアボールで歩かされた吾郎。

続くは夏目。

ここもヒッティングのサインを安藤監督は出した。

初球、夏目が鋭い打球は三遊間を破る、

と、思われた。

スパン！

前原「捕った!!」

沢村「あんな深いところにショートが!!?」

二郎「フンッ

あの初回のプレーを見てもまだ強硬策で来るとはな。」

吾郎「クソッ、ダブらせっかー!」

ゲッツー阻止をすべくスライディングでプレッシャーをかける吾郎。

しかし、一郎は軽業師の如くジャンプしてかわし一塁へ送球。　ダブルプレー成立だ。

スライディングで仰向けに近い体勢の吾郎を跨ぐように着地する一郎。

一郎「1ついいこと教えてやろう。

夏の大会で本牧リトルが捕った72のアウトの内、65個を俺達3人で捕ったアウトなんだよ。」

吾郎「なにぃ！」

3人の守備範囲の広さは一塁線と三塁線以外を占めている。
そして、3人が守るセカンド、ショート、センターを線で結ぶとトライアングルの形になる。

それが鉄壁の守備を誇る、ブラックトライアングルと呼ばれる由縁である。

さらに、一郎が一言加える。

一郎「点を取りたきゃホームランを打つことだな。
まあ、お前はこの試合、全打席敬遠なのは決まってるけどな。」

完全に三船リトル最大の得点源を封じられたのを宣告された吾郎。

果たして、吾郎が敬遠される状況で三船ナインはブラックトライアングルを破ることはできるのか？

続く